
千の夜を越えて～虹の彼方へsecond story～

みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千の夜を越えて～虹の彼方へ second story

【NZコード】

N9100M

【作者名】

みかん

【あらすじ】

祝＆感謝！1000アクセス突破 ありがとうございます

“虹の彼方へ”の続編です。

序章で“虹の彼方へ”的概要を書いていますので、“虹の彼方へ”を未読の方も、十分本作からでもお楽しみ頂けると思います。
どうぞ”覗く”ださい！-。

神楽との~~せき~~じない関係に悩む妃音に、如月の恋が絡んでどんでもなく波乱の予感が！？

今回もまた不器用な2人が2人を見守る周りの人達を巻き込んで時空を越えたドラマが繰り広げられます。

良かつたらー！一読下さい

～序章～（訂正版）夢の果て

これは、今から何世紀も先のお話。

地球は“国”と言ひ概念を無くし、

宇宙もまた“惑星”と言ひ概念が無くなつて、

“惑星”が一つの“国”として機能している時代。

ある惑星に1人の皇女様がありました。

「おはよひ〜りやれこます、妃杏様。」

『おはよひ〜りやれこます、神楽様。』

地球から程近く、環境も地球に似ている琉冠星と言ひ名の惑星。

皇女様の名は妃杏。

男女兄弟関係なく、皇家に産まれた時に、琉冠星の守護神とも言ひ

べき“プラチナムマウンテン”の鉱石、

“プラチナムストーン”

と言つ名の石が反応した者が次期皇位継承者となり、妃杏はその、次期皇位継承者なのである。

「妃杏様、ワタクシに“様”はお止め下さい。」

神楽があたふたする。

神楽は妃杏付のヒーロー（ヒーロー）で、妃杏のマネージャーである。

この神楽、神楽が7歳の時に大ケガを負つたのだが、
その場に居合わせた、まだ若干2歳の妃杏に迅速かつ的確な処置を
施されて以来、

“インペリアルゲート”にゲートインし、次期後継者の妃杏に仕え
る口上だけを用指して来た。

インペリアルゲートとは言わば宮内庁のような機関で、皇家直結の
国家機関である。

皇家の護衛・執務を担当するこの機関は、國家の最高機関であるため、入るにもかなり困難。

その前にまず、養成機関の“アカデミア”に入学しなければならぬのだが、これもまたハイレベル。

“インペリアルゲート”イコール“国民の代表”と言つ位置付けにあるため、

アカデミアにいる間だけでなく、インペリアルゲートに入り、“エージェント”として正式採用されてからも毎月行われる考査で8割以下を取ると、即留年もしくはアカデミアからやり直しと言つ厳しさのなか、

神楽は7歳の時から目指して来ただけに、アカデミアの入学試験からインペリアルゲートに入つて現在に至るまで、未だにオールパーフェクト（満点）を取り続いている、

後にも先にも現れていない“伝説のエージェント”なのである。

インペリアルゲートの最高責任者である、“boss”（朱雀）の計らいで神楽は何とか晴れて念願の妃杏付の責任者^{マネジャー}に就任し、これで一件落着！！！

・・・の、ハズだったのだが、、、

『もうそろそろマネージャーとしてじゃなく、婚約者として見てもらわないとね！』

妃杏に敬語を遣われる口に慣れてない神楽は、たじろいでばかり。

無邪気に語る妃杏に、神楽は何も反論出来なかつた。

“神楽はアタシのコトは後継者としてしか見ていない。アタシが言えどもしてくれたり、何も言わず側にいてくれたりするのは、あくまでもアタシが後継者だからなダケだ！！”

と暴走する妃杏に、

“妃杏様は次期後継者様。自分はお仕え出来るダケで十分！”

と自分の気持ちを隠し通す神楽の2人は、

周囲をヤキモキさせ続けていた程だった。

周囲は、誰もが2人のそれぞれの気持ちに気付いていた。

気付いていないのは当の本人達だけで…。

『いくら神楽がアタシのマネージャーだからって言つたって、行くは皇妃王になられるんだから。周囲だってみんな神楽様つて呼んでるでしょ！。』

屈託の無い妃杏の笑顔に、神楽は思わず顔を赤くしてうつ向いた。

本来、男性であれば“皇王”であり、そのパートナーは“皇妃”なのだが、

妃杏は女性皇王の為、“皇王妃”となり、そのパートナーは“皇妃王”となる。

女性魔王は3代ぶりのコトで、しかもそのパートナーがエージェント上りと言つコトもあり、国民の期待はかなりのモノがあつた。

「おはようございます妃杏様、神楽様。妃杏様の今日の『』予定は…」

妃杏のサブマネージャーの如月。

この如月、エージェント1年目のド新人なのが、今や次期マネージャーと言つ、超異例の大出世を果たした幸運な男である。

『ありがとう、如月。』

如月を見る妃杏の表情は、まるで子供の成長に目を細める母親のように見える。

妃杏と初めて会つた頃の如月は、いかにもアカデミアを卒業したての知識でガチガチのアタマでつかちと言つ印象で、如月ではなく神楽に絶対の信頼を寄せていた。

だが次第に、神楽とは違う信頼感を如月に抱くようになり、

神楽が、プラチナムストーンに導かれし妃杏の運命の相手だと気付いた後、異例中の異例とも言つべき見習いの如月をサブマネージャーに抜擢したのは、

神楽と妃杏、2人共通の意見だった。

神楽もまた、以前から部下の如月を信用していた。

如月が部下として来た時から自分でやれば済む口トでも、『如月の評価の為に』とわざわざ如月にやらせたりして、気配りも忘れず、アカデミアでの様子をロスから聞いて、自ら如月を受けた程だった。

(当の本人は知らない。)

『如月にまた叱られますよ? 『皇妃王様らしくなさって下さい!』つて!』

如月の最近の口癖を引用する妃杏。

またしても反論出来ない神楽。

普段のマネージャーとしての立場であれば容赦なく反論する神楽なのだが、

“皇妃王”としては、てんで弱くなってしまつのである。

実質的に妃杏の方が立場が上なので、弱くなつてしまつのはどうしても仕方無い口トなのだが…。

確かに神楽は、常に如月から口焼く『皇妃王様らしくお振る舞い下さい』と言われ続けている。

とは言え、所詮相手は自分の部下。

その度に如月には強く出で、『オレはまだあくまでも妃杏様の婚約者だ! まだ皇妃王では無い!』と反論しているのだが。

「まあ、神楽様は妃杏様にお仕えしたい一心でここまで来たお方ですから、仕方ありませんよね。」

如月は誰よりも先に、2人のそれぞれの気持ちに気付いていた。

神楽の性格も、妃杏の性格も、誰よりも理解している自信が如月にはあった。

自分が神楽と妃杏の肝煎りでサブマネージャーになれたのも、本音は何にも代えがたい程の喜びだったが、

“「神楽様がマネージャーで居られると言つのにそれでもサブに就きたい奇麗な方なんていませんよ！…」”

と、上司の神楽に食つて掛かる程、如月もまた神楽に信頼を置いている。

“「オレはまだマネージャーだ…オマエで十分だ」”

神楽もまた、譲る気配は微塵も無かつた。

だが妃杏本人は1日も早く神楽に、今までの“皇女としての妃杏様”から、“パートナーとしての妃杏様”として接して欲しいと言う点からも、本音では今すぐにでも神楽にマネージャーを外れてもらい、如月がマネージャーになつて欲しいのだが、、、、

現時点すでに、ほとんどのマネージャー業務は如月が行っている。

如月も妃杏も、中途半端なコトが嫌いな神楽の性格を知っているからこそ、“そろそろマネージャーに…”なんてコトは言えない

でいた。

「別にワタクシ個人としては、マネージャーだろうがサブマネージャーだろうがどちらでもイイんです。」

妃杏と2人の時間、時折如月はサラッと笑い飛ばしながら言ひ。

如月は、まだ神楽が自分のチーフだった以前から良く言っていたコトバがある。

“妃杏様がいてチーフがいてワタクシがいる。怖いものナシですね。”

この「コトバ」を初めて聞いた時は、“何て自意識過剰なヤツなんだ？”と思つてしまつていた妃杏だったが、

その後何度もこの「コトバ」に救われてきた。

何かある」とこの「コトバ」と言った時の如月の笑顔が甦つてくるのだった。

「ワタクシは、妃杏様も神楽様もお2人とも大好きですから、お2人のそばにいられればポジションなんて何でもイイんです！」

これもまた、如月の口癖の1つだった。

「神楽様がワタクシに妃杏様をお迎えに行かせててくれてなかつたら、妃杏様があの時神楽様やりossに直談判して下さらなかつたら、今ココにワタクシはおりませんからね。」

如月には、神楽に対しても妃杏に対してもアタマが上がらない理由がある。

だがそれが、如月が2人に絶大の信頼を置いている理由もある。

『あの時はイマイチ訳が分からぬまま、完全なまでの同情でんなコトロにしちゃつてたケド、今は言つといて良かつたと思つてるよ。』

妃杏の表情に、嘘は無かつた。

まだアカデミアを出てすぐの頃、アカデミアを首席で卒業した如月は、自分に絶対の自信があつた。

見習いの分際で、上司の神楽に何の断りもなく勝手な行動を取つた為に、アカデミアに出戻りする寸前まで行つた如月だつたが、

妃杏の恩情で、かろうじて出戻りは免れたと言つ過去がある。

如月のフォローと妃杏の恩情、

どちらか1つでも欠けていたら、今頃如月はエージェントすら続けていられなかつたに違ひない。

ある意味、神楽にとつても如月にとつても、妃杏は“命の恩人”なのである。

と言つても、当の本人は全くそんな氣は無いのだが。

「仕方無いとは言え、神楽様も困つたモノですね。」

苦笑いの如月。

『アタシの悩みなんて神楽は気付かないよね…。』

妃杏も苦笑い。

妃杏は未だにある悩みがある。

それの解消法として、神楽に対し“神楽様”と呼ぶよつとしているのだが、そんなコトとは神楽はつゆしきや…。

“「お止め下せ」”と叫びまかり。

「「」結婚なされば変わりますよ。」

優しく微笑む如月だが、イマイチ妃杏は腑に落ちなかつた。

妃杏の視線は遠い未来を見ているよつだつた。

神楽との未来 - - - -

妃杏は空を見上げていた。

アタシが肌身離さず身に付けていたプラチナムストーン。

この琉球星の守護石である。

この石は皇位継承者ダケが持つコトを許され、持つ者によって違った力を發揮する不思議な石なのだ。

自分が産まれた時から身に付けていたから、取り立てて“特別なモノ”と言ひ意識は今まで全く無くて。

むしろアタシは“御守り”だと思つていた。

そのくらい自然な存在だった - - -

この石の正体を知るまでは

アタシは3歳になったその日から17歳になる寸前までの約14年間、2世紀前の地球で過ごしていた。

何かの衝撃で出来た時空間の歪みが原因らしいんだけど、その時の衝撃でそれまでの記憶まで亡くなっちゃって、

アタシは孤児として施設で少しの間育ち、その後神崎妃杏として神

崎家の養女として幸せに暮らしていた。

あの満月の夜までは - - - -

その何日か前から前兆じみたモノはあったけど、決定的だったのはある満月の夜で。

アタシの潜在意識に如月が入り込んで来た。

そこで明かされたのがアタシの正体。

まさに“青天の霹靂”

だつた

何となく自分が、“普通じゃない”コトは気付いていた。

その理由の一番は、やっぱり、このストーン。

アタシ以外の人にはこの石が見えなかつたの。

嘘みたいだけど、ホントの話。

養父母の神崎夫妻にも、幼い頃からの付き合いの親友にも、最初にお世話になつた養護施設の先生にも、アタシを施設に連れて行って

くれた厚生員さんも。

だからこの石の正体を調べようにも、自分一人で調べるしかなくて、パワー・ストーンのお店に行っても見えないモノは答えられるワケもなく。

でも不思議と、怖がつたり気味悪がつたりってのは無かつた。

アタシ、施設に行くまでの記憶がまるで亡くなつていて、自分の名前・誕生日以外のコトは何も覚えていなかつたの。

どこから来たのかとか、どうやって来たのかとか、どうして1人なのかとか、両親の名前とか。

それでいてわずか3歳でピアノが弾けてて、よく施設でキーボードを弾いてた。

ソレがきっかけで、ピアノ講師の神崎ママがアタシを養女について迎えてくれたんだけどね。

如月がアタシの潜在意識の中で明かした衝撃の真実 - - - -

それは、

アタシは2世紀未来の“琉冠星”と言つ惑星の皇女で、しかも皇位継承者だつて言つ、何ともハチャメチャな真実だつた。。

その時はもちろん全く信じられなかつたけど、そう言われて見れば思い当たるフシつてモノが次から次へと出てきて、

如月が来ていた服の胸ポケットにあつた、刺繡のエンブレムがアタシが施設に連れて行かれた時に来ていたワンピースの刺繡と同じだつたコトや、

言つてるのは神崎ママじゃないつてのは分かつてたけど、なぜか耳に焼き付いているコトバがあつて。

ストーンの、“この石は命と同じくらい大事なモノ” つてのももう一つ、

“困つている人を助けるのがアナタの役目”

その2つの意味も、アタシの正体が分かつて、やつと繋がつた気がした。

しまいには、誰にも見えていなかつたペンダントのストーンが、如月には見えていて…。

“「そのストーンがこの地球に存在しないモノだからです」”

なんて言われて。

さらに如月の話の影響で、その口からと言うモノ、今まで一切出でこなかつた幼い頃の記憶が脳裏に残像として甦つてきたり、

レジスター二アつて言う、琉冠星の反国家組織に狙われてアタシが存在していた事実がレジスター二アのせいで消えちゃつたり、

如月に言わされた通りに、心の中で如月を何度も何度も強く呼んだら何故かその上司の神楽が現れたり。

でもその時に、アタシの失われていた記憶が完全に覚醒しちゃって、

アタシは抗えない現実に、見事に打ちのめされたのだった。。。

それからうと言つモノへ、改めてこの石と向き合つコトになつたのだが、

unbelievableでは益々パワーアップし、

それでもやつぱり不気味さや恐怖心は一向に起きなかつたけど、

ただただ驚き続けるばかりで。

でもこのストーンは、ホントにアタシを護つてくれてるつてコトを痛感させてくれた。

自分の正体が分かるまでの十数年、今思えば一切危険な目に遭わなかつたのはストーンのお陰だつたのかなつて思えたり、

レジスターAから何度も護つてくれたり、

ハタから見たら、“男性恐怖症”かつて親友の璃音が心配する程男性を真剣に好きになるが口吐無かつたのも、ストーンのパワーだつたり。

何でもこのパワー、同じストーンでも、持つ人によって発揮されるパワーが異なるらしく。

代々の魔王に共通するパワーが幾つかあって、その中に、

“想う人が現れた時、その人が運命の相手”

なんてのもあって。

結婚相手を見極める力も、この石にはあるのだ。

でもねえ、、、

そのお陰で“異性と付き合ひ”「トドがどうこうコトなんか解らなくて、ハードに大変だつたんだ。。。」

ましてやアタシのその“運命の相手”は、すぐそばにいる人だったから。

そう、、、

エージェントの神楽。

アタシはそれまでずっと、勝手に“神楽はあくまでも後継者としてしかアタシを見ていない”って思い込んでいて、

神楽に対する特別な気持ちを持っていたにも関わらず、自分で無理矢理抑え込んでいた。

まさかその気持ちが、ストーンの力だなんて知るハズ無かつたから。

未だにこのストーンの力は、未知数。

持つて いるアタシは もちろん、アタシよりストーンとの付き合 いが
長いお父様やお爺様ですら、完全には分から ない。

それがこの、 プラチナムストーン。

この琉冠星の守護神。

この琉冠星の、 プラチナムマウンテンにしかない鉱石である。

～第1章～ 時を超えて

ある日の夜。

アタシはこつものよつこーべランダで空を眺めていた。

今田は満田。

地球でもじょっちゅうこんな感じでよく空を眺めてたなんてふけてみたりして。

時々地球でのコト思って出ししゃりなんだよね。

仕方無いよね。

でも何百年も昔のコトなんだよね。

アタシヤ 浦島太郎だよ。

璃音との田々、神崎家のコト、神楽と如月が来てからコト。

何もかもが昨日のコトのよ。

如月や神楽に“妃杏様”なんて未だかつて言われた試しのない言い方されて戸惑つたり、時には苛立つたり…。

考えてみれば出逢った時から“妃杏様”だもん、なかなか同等なんか見れないよ、神楽のコト。。。。

何とか頑張つて同等に接しようと、アタシなりに必死で考えて今は神楽に敬語で接してみてるケド。

初めて神楽に逢つた時、分かんなくて敬語遣つてたら超が付く真顔で“「敬語はお止め下さい」”って言われたケド、今はテレして“「お止め下さい。」”って言う程度…。

出逢つた時には既に主従関係にあつた2人が、今や婚約者だもんなあ。

かたや神楽は幼い時の恩ダケでアタシに仕える「コトダケを目標に、今まで生きて来たオトコ」。

如月も神楽も初めてアタシの前に現れた時からアタシのコトは“皇位継承者”だもんね。

アタシも“「妃杏様」”呼ばわりされて初めは戸惑つたけど、段々その気になつてきてたし。

そんな関係のアタシと神楽が“フツーの恋人同士”になれる日なんてるんだろうか。

空を見上げながら、ふと考える。

出るのはため息ばかり。

空にはキレイな満月なのにな。。。。

「妃杏ー。」

ん？

モニターを見るとモニターには、お隣のサルミナ星のルアナ皇女がいた。

『どうしたんですか？皇女。』

ルアナ皇女はアタシの3つ上。

実は如月がお慕いするお相手。

まあ「コだけの話なんだけどね。

背が高くてスタイルは抜群で頭脳明晰。

歯に衣着せぬ物言いで、良く周りから注意されてるらしいけど、本人は全く気にしてない様子。

裏表ない性格だから信頼は物凄くある。

アタシにとってお母様の次に尊敬する女性。

何と無くだけど、璃音みたいなカンジで、なおさら親近感が湧くんだよね。

「アンタんtronのウルトラスーパーハイパー エクセレントスペシャルブレインとbossに用があるんだけど今大丈夫かなあ。」

・・・・・・ルアナさん???????

2度同じ言い方出来んのかな。

どんだけくつつけんだよ。

よくもまあ出て来るねえ。

ちよつぴり呆れる。

ちなみにたぶん神楽のコトだと思つ。

でもなんだろ。と神楽に用なんて。

『確認してみます。お待ち下さー。』

アタシはモニターを切り替えて、と神楽それぞれに聞いてみた。

「かしこまりました。皇女直々の御用とあらねお断りは出来ません。すぐに準備致します。」

2人とも即答だった。

アタシはすぐさまモニターを再び切り替えてルアナ皇女に伝えた。

「ありがとう助かるわ。今から行くから妃杏のことをでいい?』

えつー?

『アタシも宜しいのですか?』

「アンタにも聞いて欲しいのよ。」

何だろ、胸騒ぎがする…。

ルアナ皇女のこんな顔見たコトないよ。

「分かりました。お待ちしております。」

アタシの部屋でと言うコトを2人に伝え終わるか終わらないかのうちに、ルアナ皇女がルアナ皇女のSPを連れて現れた。

『早っっっっっ。』

つい低い声で呟いてしまった。

「琉冠星はイイねえ。アタシも移住しよつかなあ。」

? ? ? ? ? ? ? ?

いきなりの衝撃発言。

「ルアナ様！」

SPのマールスさんにたしなめられてる。

皇女らしいっちゃあ皇女らしいわな。

一足先に現れたのはbossだった。

「失礼致します。」

『じゅん。』

「こりひしゃこませルアナ皇女。わざわざお越し頂き恐縮です。」

bossはルアナ皇女に向かつて“エージェントの最敬礼”である、“跪いて一礼”をした。

「いわげんよう神楽さん。気にしないで、アタシが来たかったダケだから。ちょっと自分のトコ「じゅうづらかっただから。」

益々胸騒ぎ。

「失礼致します。」

遅れて神楽登場。

案の定「一ヒー持参で。

たすが“かゆこトコロに手が届くオトコ”ね。

それにしても如月逢いたいだろ? なあ。

「そう言えばもう一人は?」

ルアナ皇女は部屋を見渡している。

「おつ！」

「如月も同席して宜しいのですか?」

心の中は一ヤケてる。

表情は至って冷静に。

「妃香のHージェントなんだから。」

「恐れ入ります。」

なぜかboss。

bossが如月を呼んでくれた。

如月の喜ぶ顔、見たかったな…。

まさかそのままで来ないよねえ。

「失礼致します。」

さすがに冷静に登場。

内心ひと安心。

如月の気持ちはアタシしか知らないから。

神楽やbossが聞いたらきっと“立場をわきまえろ！…”って怒鳴られるだろ？からアタシからも言わないし。

だけど神楽も如月もやっぱり“ルアナ皇女は璃音様みたいですね”つて良く言ってる。

だから如月がホレるのかなって思つてみたりして。

「「」やげんいかがですカルアナ様。」

この如月の嬉しそうな顔つたらありやしない。

見てるこいつが照れちゃうよ。

「といふやあ…」

急に表情を変えた皇女にウチらも緊張する。

「アタシやあ、 、 、 」

皇女はゆっくり、言葉を選ぶよつて話してくれた。

何でも皇女の言つ口には、サルミナ星に異変が起きてるんだナビ
誰にも信じてもいいべなくして困つてことの口よ。

思わず息をのむ。

皇女は、確実にサルミナ星の自然が侵され始めているとみんなに訴
えているらしい。

そこでもみんなに諒じてもいいべへ、ウチらにソーサーチを依頼したい
との口だった。

当然ウチらの意見は一致。

“隣の惑星であるサルミナ星の危機は琉冠星の危機も同然。何らかの影響も考えられるから当然お請け致します。”

皇女は物凄く嬉しそうに応えてくれた。

「皆様のお力を借りなければならぬコトは大変情けなく思います。申し訳ありません。」

マールスさんが深々とアタマを下げた。

早速作戦会議が行われた。

もちろんこの5人ダケの秘密。

だからいくらなんでもそんな頻繁にお互い往き来出来ないから、神楽と如月とbossのウルトラスーパー何とかブレインを最大限に駆使してサルミナ星の状況を逐一チェック出来るシステムを開発するコトに。

まあこの3人に掛かれば探査衛星の一つや二つ、モノの数分で出来ちゃうんだろうけど。

．．．．出来たらしい。

「次は解析プログラムですね。」

つぐづぐ感心ダワホントに…。

「ホントスゴいね。」

皇女もマールスさんも驚愕の様子。

2人が帰つてからもプログラミングは続いたけど、わずか数分で出来上がつたのだった…。コレもやっぱり

アタシはただただ見て いるだけ。

もちろん5人以外にはバレないように気を張らないとイケない。

ソニガ難点と言えは難点。

一處に、かで「ハエロニル用兼る事」に注な「ひね正」と書

「皇女の名譽の為は、何とか解決しないといけませんね！」

張り切る如月。

アタシは1人ヒヤヒヤしていた。

“んな所で歌いたるのよ、やめやめ、うとうとう”

つ
て。

「お前皇女に好意があるのか？」

! - - . - - ! - - . - - ! - - . - - ! - - . - - ! - - . - -

だから言わんこっちゃない。。。。

鋭いbossのツッコミに、アタシは思わず口に含んでいたコーヒーを吹き出しそうになつた。

如月を見る神楽の視線が怖かつた。

数日後 . . .

アタシは如月とサルミナ星に来ていた。

名田は皇女に逢いに。

実際は、リサーチ。

データベースにはない性質の物体が検出されたから。

とりあえず皇女の「家族」に挨拶。

サルミナ星のロイヤルファミリー。

サルミナ星は男女問わず一番上が継承するしきたり。

皇女には継承権はない。

だから余計に如月は好意を寄せている。

継承者のシュナ皇子は超イケメン。

全国民の憧れの的。

お妃は誰がなるのかが最大の関心事みたい。

まあもちろんそれなりの方がなるんだろうけど。

だからルアナ皇女ももちろんかなりの美人。

ルアナ皇女もどんな人と結婚するのか皇子程じゃないにしても注目されてるらしい。

だから余計に如月は気後れしてんのよね。

まさに“高嶺の華”。

アタシは応援してるよーー。

如月はいつでもアタシを応援してくれてるもん。

「うきびんよう皇子様。」

300%の力で“よそゆき妃杏”スマイル。

お母様にこれでもかつてくらい叩き込まれたからね。

“国民の前”用と、“よそゆき（来賓等）”用と。

最初はノイローゼになりかけたけど今じやすっかりフツーに出ちゃうよ。

「よつこそ妃杏様。」

カツコイイわあ皇子。

そりゃ全國の憧れの的にもなるよ。

いや!? 浮氣じゃないよ

透氣化せんよ？

“カツコイイ”つたって、やつぱうanaxでもときめくワケではないんだな、コレが……。

プラチナムストーン恐るべしだよ。

他の二家族にも挨拶を済ませ、自然な流れで皇女の御部屋へ。

さつそく本題に入ろうとしたその瞬間、マールスさんが何やら反応した。

「ですが今は妃杏様が…」

マールスさんの困惑顔が。

ガイル？

今度はふゝきらほうな皇女が

ガイル？？？

如月と顔を見合せた。

「追っ払つてよ。」

皇女のすんごい態度。

今までこんな皇女見たコト無いわ。

「婚約者としてキミの交友関係は知つておく必要があるだろ。」

ガイル？？？

“婚約者”！？

皇女の顔が一気に変わった。

「ガイル様」

マールスさんが制止しようとするのを振り切りガイルはアタシ達の前に立つた。

「初めまして、ガイルと申します。」

何ともジェントルマンな人じゃないのよ。

『挨拶がいかにもどこかの王子様ってカンジだわ。

『初めまして。琉冠星の妃杏と申します。隣はエージェントの如月です。』

如月の顔が見れない…。

「挨拶なんかしなくていいワよ妃杏。」

「どうみても皇女の顔が恐ろしくなつていいく。どんどん皇女の顔が恐ろしくなつていいく。」

「どうみてもガイルは皇女に嫌われてるワね。」

「ボクは婚約者として挨拶してるんだ。」「

如月のコトを思つと、『婚約者』なんて聞くとアタシまでドキドキしちゃうつよ。

「婚約者だなんて誰も認めてないわよ。アンタが勝手に言つてるだけでしょ? だいたい勝手に人の「。。。」に入つて来ないでよ。」

皇女の機嫌の悪さまでびつみてもとっくにMAXを振り切つていた。

「マールス様、どうこうコトですか?」

「うわああああ…。

如月の声が上ずつている。

「ボクと皇女はお互いのお祖父様が決めたフィアンセなんだ。皇女は次期王妃なんだよ。」「

アタシも如月も絶句した。

するしかなかつた。

「それはとっくに時効だつて言つてるハズよ。」

皇女は全くガイルと目を合わせようとしない。

皇女の顔から笑顔が消えてどのくらいだらう…。

何だか背後から殺氣だつたモノすら感じる。

「皇女の交友関係が分かつたトコロで、ボクは失礼するよ。妃杏様、
また。」

さりげなくガイルは帰つて行つた。

「一度と来るな！」

やつとガイルの方を見た皇女はガイルの背中に向かつて吐き捨てた。

大きくため息をつく皇女。

しばしの沈黙。

後ろを振り向けない。

沈黙を破つたのはマールスさんだつた。

「ガイル様はイグアス星の王子でして、その昔ルアナ様のお祖父様
のランズ皇大王様の代に我が星はイグアス星に攻められまして、そ
の時に停戦の条件として、“いづれ生まれてくる女子を我が国の王

子の婚約者として迎え入れる”つてのを提示されたのです。』

そんな…。

『それって人質じゃない！いつの時代の話よ。』

中学高校の日本史じゃないのよ？

「だからアタシは時効だって言つてんのよ。」

落ち着きを取り戻した皇女、表情もいくらか落ち着いている。

それでもずっと無言の如月が気になる。

ホントは叫びたいハズ。

暴れたいハズ。

今すぐに皇女に駆け寄りたいハズ。

だけど如月は毅然とした態度でアタシの後ろにいる。

如月の「コト思つたら泣けておけやつよ。

この恋、何とかならないモノかな。

～第2章～ 時の迷子

『「」みんなさい、今日は帰ります。またにします。』

アタシはいるに耐えなくなつて、用件を済ませずには帰つた。

「妃杏様？」

怪訝そうな如月の表情が依然として見られなかつた。

皇女もマールスさんもそして如月も、唚然としていたけど、アタシは構わずその場を去つた。

毅然とした態度の如月を見れば見るほどに辛くなるから、今日はこれ以上いたくなかった。

「「」めんね妃杏…。」

唚然としたままの皇女。

「妃杏様？」

如月が何度も呼び止めようとする。

如月の声が胸に響く。

自然と涙が込み上げてくる。

「妃杏様？」

『今日はもういいわ。神楽と話がしたいから。お疲れ様。』

やつぱり如月の顔を見ずに。

「かしこまりました。では呼んで参ります。本日も一日お疲れ様で御座いました、失礼致します。」

背後に如月を感じなくなつた途端、アタシは洪水のように泣きじやくつた。

久し振りにこんなに泣いてる。

苦しいくらいに泣いてる。

今まで今でも如月はずつとウチらのコトを応援してくれていた。

“お2人とも大好きです。お2人には幸せになつてもらいたいダケです。”

そういう時の如月の笑顔がアタシの脳裏に焼き付いている。

ソレが余計にツラい。

今如月はどうしているだろうか。

1人何を思つているだろつか。早く如月を“任務”から解放してあげたかつたから。

ダメだ、泣きすぎて肩がヒクヒクしている。

ひやつ…………！

神楽？

そつと優しく抱き締めてくれている。

しかもコーヒーの香りが。

『神楽様？』

声にならない声。

かなりかすれてる。

「どうなさったのですか？如月に聞いて驚きました。皇女のトコロへ行つていいくらも経つてないではないですか。」

神楽の声がちょっと怖く感じた。

アタシは神楽の方を向き直し、涙ぐめしゃぐめな顔で神楽に抱き付いた。

ひとしきり神楽の胸で泣いた後、アタシはコーヒーを何口か飲んだ。

その間神楽はずっと何も言わずに、とつもなく優しく抱き締めてくれていた。

コーヒーを飲んで落ち着いたら、あの時のコトを思い出しかやつた。

「ひちに来て間もなく、アタシの誕生日の前夜、お父様がアタシの部屋に来て、しかもわざと神楽まで呼んで突然プラチナムストーンの話をし出したの。

“想う相手はいるのか”なんて、突飛もないコト言いで。

突然何を言い出すのかと、心臓が握り潰されたような感覚だつた。

神楽に対しての気持ちで一番悩んでた時で、しかもその直前にどうしていいか分からなくなつて神楽に八つ当たりしちゃつてたから、思わずとつたに神楽の田の前で“いないです”なんてウソついて。

“プラチナムストーンは持つ者によつて発揮されるパワーが異なるケド、歴代の魔王が皆経験してるコトがある。”

そつ言つて、続けたコトバにアタシも神楽も絶句したんだよな。

“想う相手が現れた時、その人が妃杏の運命の、自分にとつてのオシリーワンの相手と言つコトのようだ”

アタシは田の前が真つ暗になつて、何トンもの衝撃を受けた気がした。

神楽は、見た目は冷静だった。

といひが後から如月がすつ飛んできて、アタシにかみついて。

如月は一番最初にアタシと神楽のお互いの気持ちに気付いてた。

その時からずっと未だに如月はウチらのコトを応援してくれている。

あの時、神楽は言ったよね。

“アタシと誰かが一緒になるのかと思ったら、とたんに自分の感情をコントロール出来なくなっていた”

つて。

冷静沈着な神楽がそうなんだもん、如月は？？

どうかしてあげたい。

どうしたらいいの？？？

とりあえず皇女の話をしてみた。

もちろん如月のコトは出さずには。

皇女とガイルの話。

さすがの神楽も驚いたみたい。

『あんな嫌がる皇女、見たコト無い！…あんな皇女見たくないよ！…どうにかならない？』

タメ口に戻つてしまつていた。

でもそんなの気にしてる場合じゃなかつた。

『イグアス星がサルミナ星に攻め込む前にタイムトリップして阻止出来ない?』

ふとアタマに過つた。

黙つて首を横に振る神楽。

『どうして? 神楽様や如月がアタシのトコロに来れたように出来ないの?』

アタシ、自分で相当ムチャクチャなコト言つてんのは分かつてた。

2人が2世紀も過去の、しかも違う惑星のアタシのトコロに来れたのは、プラチナムストーンのお陰だつてコトは分かつてる。

『何でもかんでも技術が進歩していく何だつて出来ちゃうのにどうして時空間移動は出来ないの?』

取り乱すアタシに、神楽はどうしても困惑氣味。

コレだつて分かつてるよ。

どうして時空間移動は出来ないか。

過去にそういう技術はあった。

当たり前に過去に行き来出来る技術が。

「他の方法を考えましょう。」

神楽はアタシが取り乱しているだけなコトをお見通ししたいだ。

過去に言つて未来を変えようとしても所詮それは出来ない。

過去に戻つてどうしたくらこじや未来は変えられない。

その瞬間は変わつても、どこかで上手く帳尻が合つちゃつて結局は何も変わらない。

もしくは、タイムトラップと言つ“歴史の歪み”が出来てしまい、そんなつぶに過去から戻つて来れなくなる。

そんな“時の迷子”が問題になつて、結局それ以上技術は進歩しないまま。

未だに戻つてこれない“時の迷子”はたくさんいる。

だけど…

『神楽様や如月のブレインだつたら何とかならないの?』

アタシは無我夢中だつた。

とにかく如月を助けたくて。

“如月はもしかしたら望んでないかも知れない”

心の片隅ではそう思えてるよ。

だけど、この衝動は止められなかつた。

“どうしようもなく。

また涙が…。

「つづ向いたアタシを神楽がそつと包んで言つた。

「如月の為ですね？」

…………！

思わずカラダが反つてしまつた。

思いつきり眉間にシワを寄せ、口元もつり上がって、アタシ変な
顔。

神楽はとんでもなく優しい笑顔。

「人間、自分のコトにはとことん鈍感ですが人のコトにはとことん
敏感なようです。本来であれば上司として“立場をわきまえろ！！
”と怒鳴り付けたいトコロですが、なにぶんワタクシが言える筋合
いではございませんので。」

含み笑いを見せながら神楽は優しい笑顔のままですう言つた。

それを聞いたらアタシ、また泣けてきちゃつて。

神楽の胸で泣いちゃつたよ、本日2回目。。。

「ワタクシとしても如月の幸せは願わざにはいられません。」

神楽・・・。

オトコの友情つてヤツかなあ。

アタシは今更ながら、改めて神楽のスゴさを感じた。

…と言つよつ、ちょっと誤解してたみたい。

神楽のコトだから如月にはメチャクチャ厳しいのかと思つてたから。

神楽が如月の想いに気付いてたつてコトと、

“部下として”だけじゃなく、“オトコとして”も如月を見ていた
つてコト。

正直意外だワ。

ごめんね神楽。

パートナーのコト解つて無いのは、アタシの方だつたよ。

心の中で反省。。。

「如月の様子を見て参ります。くれぐれもワタクシが気付いている
コトは黙つていて下さいね。」

ほくそ笑みを浮かべながら神楽は如月の元へ行つた。

何だか神楽のこんな一面、見た口ト無かつたからちょっぴり嬉しい。

心なしか「一ツ」してゐる。

尚更何とかしないこと……

イイ加減、如虫に日頃の恩返しをしないとな。

まづはやつぱり皇女が言つ異変を突き止めないとな。

つて、その為に行つたのに帰つてきたのは誰だよつてハナシだけど
ね。

「妃杏、『めんね。』

皇女だ。

モニター越しに。

『アタシこそ申し訳あつません。用件があつて行つたのはワタクシ
の方でしたのに。』

皇女は謝る「トないよ……、悪いのはアタシなんだから。

『データベースにはない性質の物体が検出されました。それについて
お話しすると思つたんです。』

「アイツだよ……やつぱつね。」

なぬつ？？？？？

アタシのコトバを最後まで聞くか聞かないかで皇女は眉間にシワを寄せて、一言そう言った。

“ アイツ” ってまさか？

「ガイルがアタシに有無を言わさないよう何か仕掛けたんだよきっと！―だから誰もアタシの言つてるコト真に受けてくれないんだと思つのアタシ。」

アタシは何も言い返せなかつた。

皇女の言つてるコトが皇女の推測に過ぎなくて、確かに言つてるコトは納得できるから。

だから、うかつに“ まさか…” とも、“ そうですよ” とも言えない。

だけど、そんなコトで自分の惑星の危機を見てみぬふりなんてするのだろうか。

そんな疑問もある。

イグアス星に行つてみる？

何用で？

お父様やお祖父様、イグアス星に用ないかな。

イヤ…………あつたトロロでまさかお父様やお祖父様に何かを頼むなんて出来るワケないじゃない。

じゃあどうすれば…。

マールスさんだつづつ…！

マールスさんなら一人で行つても不自然じゃないよ。

・・・だから何用で？？

ダメだ、早くも行き詰まつてしまつた。

速すぎだろアタシ…。

仕方無い、ウルトラスーパーハイパー エグゼクティブブレイン（間違いなく毎回同じようには言えてないな、アタシ。）に頼んで作つてもらつか。

バレないような、超小型無人解析システムを。

「アタシはアタシの意思で自由に相手を選びたいの。だいたい王妃なんかやりたくないよ。ガイルみたいなのタイプじゃないし。」

皇女の表情が、“嫌々オーラ”を爆発させていた。

『皇女は想つ方はいらっしゃるのですか？』

アタシは尋常じやない程にドキドキしながら尋ねた。

アタシのドキドキとは裏腹に、皇女はあっけらかんと答えた。

「たくさんいて1人に絞れないかな。」

でも、とってもステキな笑顔だった。

ちょっとびり羨ましかった。

アタシは“1人に絞れない”なんて経験ないからね。

その“たくさん”の中に、如月はいてくれてるのかなあ。

もしくは、今からでもその中に入れる余裕、あるかなあ。

聞きたい。

だけどやつぱり聞けなかつた。

あまり如月の知らないトコロで暴走するのも厳禁だしね。

皇女との会話が終わったあと、アタシは無意識にぼんやり空を眺めていた。

何を想うワケでもなかつたけど。

ガイルがいた時の皇女の顔と、

さつきの、楽しそうに話す皇女の顔が同時に浮かんで、離れなくて。

どうしたらいいんだろう。

ホントにガイルの仕業だとしたら……。

おひ――――――――の香りは――――――

失礼致します。

神樂登場。

『如月はどうでしたか?』

コーヒーを笑顔で受け取る。

「ワタクシには平静を装つておりました。サルミニナ星のコトとイグアス星のコトを2人で少し調べておりました。」

どんだけ耐えてんだよ。

皇女の「ト好きじゃないのか？」

それとも諦めた？

『今皇女と話してたのですが、アタシがデータベースにはない性質の物体が検出されたって言つたら、皇女はサルミナ星の異変はガイルの仕業だつて言つてました。だから周りのみんなはみんな信じてくれないんだつて。』

アタシの話に神楽が反応した。

「皇女の発言に根拠は無いにしても、まさか疑つつかにもこさませんね。」

アタシと回じ口で言ひてね。

「イグアス星を調べる必要がありますね。」

神妙な顔で言った。

アタシもつられて神妙な顔で頷いた。

その後biosに話し、如月にはあえて言わずに3人で（毎度の口ながらアタシはいるダケだけど）システム作りをした。

もちろんbiosに如月の口は言わないよ。

いへりなんでも言えないよ…。

でも如月、大丈夫かなあ。

神楽が気付いてる口、言つちゃつた方が如月的にはラクなんだろう。

まあそこは男同士の口だからタッチしない方がいいね。

「おはようござります妃杏様。」

今朝の如月は・・・

いつも通りだつた。

『アタシの前では無理しなくてイイんだよ。』

言わざにはいられないよ。

「妃杏様・・・」

ほんのり情けない顔になる如月。

「お気遣いありがとうございます。ですが大丈夫です。やはり身分違いだと呟つ口トを痛感させられましたから。」

『何言つてんの!アンタの想いつてそんなモンだつたの!?』

自分が一番驚きだつた。

如月のコトバの後、無意識に叫んでいた。

そこには理性も何も無かつた。

ホントに口が先だつた。

ボー然とする如月。

『ホンキで“身分違い”だなんて思つてんの!?』

止まらなかつた。

アタマの片隅では如月が望んでないかも知れないって思つてた。

だけど如月の言つてる口トガ本意じゃないつて、何となく察したから。

「妃杏様？」

戸惑う如月。

そりやそーだよな。

落ち着けアタシ。

大きく深呼吸。

『アタシは如月には幸せになつてもらいたいの。だから無理しないで。簡単に諦めたりしないで。』

一息ついたハズなのに涙がにじんでいた。

「もちろんショックでした。ですがワタクシにビックリ出来る次元の問題ではありません。」

如月のショックはアタシの想像をはるかに越えていたようだ。

怒りを通り越して諦めに変わっていたのだ。

アタシは食事の間、ずっと考えていた。

そして食事の後、みんなのいる前で告げた。

『しばらく如月に休暇を取りたいのですがよろしくでしょうか。』

「妃杏様？？？」

すっとんきょうな声をあげる如月。

如月が驚いているからか、一瞬ためらつたように見えたお父様だったけど、優しく答えてくれた。

「イイだらう。朱雀、構わんな？」

「かしこまりました。調整致します。」

bossも穏やかな表情で答えてくれた。

心の中でホッと胸を撫で下ろす。

「妃杏様？？？」

狼狽える如月だったけど、察した神楽が如月の肩を叩いて言つてくれた。

「妃杏様がそう仰るんだ。有難くお受けしる。オレに任せろ。」

神楽もまた、優しい笑顔だった。

ありがとう、神楽。

神楽の目を見て呴いた。

神楽はそつと笑顔で頷いてくれた。

少しでも、のんびりしてくれればイイかなって。

やつぱり任務から解放してあげたいから。

「何ですか？」

神楽に言われたにも関わらず納得行かない如月。

部屋に戻つてすぐ噛みついてきた。

『たまにはのんびりしなよ。』

あえてソレだけしか言わなかつた。

「・・・かしこまりました。』

全く納得してないカンジだつたけど、渋々如月はふてくされながら出ていった。

“自分を見つめ直す”

なんて偉そうなコトは思わないけど、リフレッシュしてくればいいかなって思ったから。

如月がいない方がスムーズに済むコトもあるしね。

ちょっと違つけど、神楽とゆっこり（？）2人の時間が出来るしね。

「久し振りに、よろしくお願ひ致します。」

何だか照れ臭い。

神楽も照れながら挨拶。

不思議な空気が2人を包んでいた。

～第3章～愛は時間を Ireneで？？？

如月に休みをあげて数日。

神楽と2人きりの日々が何だかモーレツに照れ臭い。

婚約者なのにアタシのエージェント。

とつても変なカンジ。

神楽が婚約者になつてからは、ずっと如月が神楽の代わりに色々やつてくれてたから。

bossと神楽で作ったシステムは、今イグアス星に滞在中。

透明で超小型だからバレない。

いくら技術の進歩とは言え、スペースシャトルとか探索衛星がこんなに小さくなっちゃうんだから、進化って凄いよね。

しかもエンジンも何も無くて。

コレをアタシがいた時代の地球の人達が見たらどう思つんだろう。

2人の開発したシステムは、この前の“サルミナ星に存在しない性質の物体”を解析するためのモノ。

だからイグアス星の至るところに行けるようプログラミングしてある。

後はこの中のコントロールブースで逐一チェックするダケ。

でも飛ばしても「どうやら」経つのに何の結果も出ない。

あの物体：何で解析出来ないんだろう。

“「人為的に出来たモノ」でしょう。それにしても化合物が判明出来ないのも不思議です。」”

boss、かなり困窮してたつ。

bossと神楽のブレインを持つてしても解析出来ないなんて。

”「念のため宇宙空間内にも幾つか同じモノを飛ばしておきます。」”

bossは用心に用心を重ねてくれた。

“どうやら姫田もあちこち探索に行つてゐるらしい。

如月のプログラミングテクニックは下手すりや神楽以上だからな。

でもアタシには一つ引っ掛かる「トドがある。

コレで原因がホントにガイルだったとして、婚約破棄まで持つていけるのだろうか…。

ホントにサルミナ星のみんなが黙認してたとしたら、意味がないんじゃないだろうか。

つて。

神楽に言つと、神楽は少し考えて答えた。

「確かにそうちかも知れませんが、仮に過去に戻つて攻め込むのを止めさせてもソレはソレで必ず婚約しないとは限りません。」

言い返せなかつた。

“歴史のタイムラグ”だ。

アカデミアで習つた。

だつたらどうしたらいいんだら?。

『やるだけやってみよ!』

もつそれしかなかつた。

「妃杏様…。」

神楽の顔が複雑な顔になつてゐる。

『神楽なら出来るでしょ?迷子にならないようにする方法。お願ひー!』

もつ“様”とか敬語とか完全に忘れていた。
とにかく懇願した。

神楽は黙り込んでいた。

「お時間を下せー。」

やつと発したと思つたらやつが出ていった。

アタシは裏庭にいた。

びつしていいか分からず、プラチナムマウンテンに来ていた。

何をするわけでも無いケドただぼんやり。

「どうかしましたか?」

お母様だ。

後ろからお母様がやつて來た。

『何でもありません。何となく來たくなりました。』

笑顔で應えたモノの、お母様にはバレていた。

「妃香が『ココ』いる時は何かあった時です。」

笑顔で言つお母様に、アタシはモノの見事にぐいづの音も出なかつた。
『もし、私が自分の意思にござわない方と、国の都合で婚約しなき
やいけなくなつたらどうしますか?』

お母様を見すに尋ねてみた。

「国の都合ですか…。ちょっと軽々しく言える内容ではあつません
ね。」

胸に何かが突き刺さつた。

お母様の答えに。

「母として、娘の幸せは願わざにはいられません。ですが、皇妃と
しては国の幸せも願わざにはいられません。」

・・・・・どうよね。

そりゃモーですよね。

やつぱり過去を変えるしかないよね。

「ナルミナ星の『コト』ですね。」

エッ…?

とつやにお母様を見た。

「以前王妃から聞いたコトがあります。」

『そうでしたか。』

お母様が王妃様から聞いていたなんて知らなかつた。

「王妃様も大変お心を痛めてお出でで、私もお父様もそのコトは気が
に掛けております。」

!-----!

今確かにアタシの脳内で、“ガツン”と音がした。

『「存知なんですか?』

耳を疑つた。

「ガイル王太子とのコトは存じております。」

うわわわ…。

『ではサルミナ星の異変のコトは?』

お母様の表情が変わつた。

どうやらそれは知らないらしい。

「どうかしたのですか?」

アタシは瞬間的に感じて、お母様に話してみた。

“何とかなるかも知れない”って。

結局お母様も巻き込むコトになつちやつたけど、お母様もboss達と同じコト言つてくれた。

「サルミナ星の異変は琉冠星の異変も同然。」

つて。

翌日、お母様はお母様のエージェントの雅さんとサルミナ星に出向き、異変のコトを然り気無く問い合わせてきてくれたよつで、やはり気付いてはいるよつだ。

だけど黙認するしかないのもまた現実で。

アタシはお母様の報告を涙ぐみながら聞くしかなかつた。

イグアス星に問い合わせたトコロでどうなるモノでもないし、それこそまた戦争になんてなるフケにもいかないし。

ガイルもそんなに大事にするつもりはないだらうし、黙認するしかないのだと。

確かに今は宇宙協定があつて、何があつても全宇宙内で争いは起きてはいけないつて締結がある。

それを知つた上でガイルの行動。

許せない。

「ぐれぐれもへんな氣を起しきつてはいけませんよ。」

ドキッキッキッキ……！……！

胸が痛い……。

『はいお母様。』

とつあえず返事。

・・・その日の晩下がり。

「妃杏様！」

部屋で執務をしていたトコロに突然bossがモニターに現れた。

「化合物がよつやく解析出来ました。やはり人為的に出来たモノの
よつです。」

神楽と田を合わせる。

送られてきたデータによると、初めて聞くものばかりだった。

「これじゃ時間が掛かりますよ。」

落胆の表情の神楽。

『boss、過去に行かせて！お願い。』

もういつでもたつてもいられないよ。

「私が行きます。」

エッ！？

如月の声…。

「 昨夜、bossと如月と3人で話し合いました。話し合った結果、如月に過去に行かせます。」

神楽…。

「 1人じゃ力不足なのは重々承知ですが、時の迷子にならない為にも、こちらから逐一指示出来るように我々は残ります。もちろん妃杏様はお残り頂きます。」

boss…。

アタシはたまらずある場所へ移動した。

「 妃杏様？」

神楽の声に耳を貸さず、着いたのは裏庭、プラチナムマウンテンの前だった。

“ お願いします、ワタシの変わりにプラチナムストーンを如月に持たせたいんです。小さくて構いません。カケラでいいんです。そう簡単なモノじゃないコトは承知しています。でもワタシの分身

として持たせたいんです。如月を迷子にしたくないんです！如月の幸せはワタシの幸せです。お願いします！！”

ひたすら祈った。

時が経つのも気にせず祈り続けた。

思えば思つほど涙が流れていって。

必死に祈り続けるアタシの脳裏には、今までの如月との思い出が浮かんできて、余計泣けてきた。

どのくらいの時間が経つただろう。

祈り続けていたアタシの視界に眩い光が見えた。

顔を上げると、天から一筋の光がマウンテンに向かって放たれ、マウンテンから光と、その中に輝くストーンがアタシに向かって伸びてきた。

祈りが通じた。

感動でカラダが動かない。

涙ダケが溢れてる。

『ありがとうございます！！！！』

硬直したカラダでアタシは何度も何度も叫んだ。

「あ、ありがとうございます。」

神楽の声がする。

神楽の声に安心したのか、カラダが動いて、神楽が隣にいるのを確認出来た。

隣の神楽はマウンテンに向かって深々とアタマを下げている。

アタシもアタマを下げた。

“ありがとうございます。”

何度も言いながら。

．．．

「それにしても相変わらず妃杏様はマウンテンに護られてますね。」

歩いて部屋に戻る途中、神楽がふと言に出した。

『何ですか？突然。』

神楽を見ると、神楽はフツと笑った。

「ワタクシが知る限り、こんなにストーンとシンクロ出来る御方は妃杏様以外おられません。」

『そんな。』

照れるよ。

「そんな御方のパートナーに認められるワタクシは何とも身に余る光栄です。」

恥ずかしさマックス！！

顔から火が出そう

『ありがとうございます。』

『でもいつの間に3人で話してたんですか？』

顔を上げて尋ねた。

「妃杏様に“時間下さい”と告げて出ていった後、その足で如月の元へ向かい、如月にある質問を致しました。“迷子になる覚悟で過去に行けるか”と。」

『ええええ？？』

くへな顔丑つむぎつたよ。

だつて、そんな質問をいきなりしたら神楽が如月の気持ちに気付い

てるコトがバレバレじゃないのよ。

「ワタクシとしたコトが迂闊でした。」

神楽、うつすら照れ笑い。

「即座に反応しましたね、見事に。妃杏様の代わりにと慌てて補足致しましたがムダでした。」

ブツ。

吹き出して笑っちゃうよ。

「如月は何も言わず、迷うコトなくワタクシを見据えて大きく頷きました。」

何だか男同士の友情つてカソジで羨ましいわあ。

いつものアタシと一緒にいる如月なら、

“「え、つつづ……！神楽様？？」”

くらー言いそなカンジなのに。。。

「その後2人でbossの元に向かい、3人で真剣に、慎重に話し合いました。」

アタシはいつもこの3人の関係と繋がりを羨ましく、誇らしく思っている。

部下と上司を越えた、男同志の深い絆がこの3人にはある気がして。

他にもヒーヒンントはたくさんいる。

アタシが一番見るのがこの3人だからそう思うダケかも知れないけど、この3人は特別な気がする。

少なくともossと神楽の間には見えない絆が深く刻まれている
と思つ。

アタシには入ろうにも入れないであろう縛が。

アタシは1人、如月の部屋に行つた。

神楽はbossの元へ。

如月

アタシの声に驚き、激しくバタバタと音を立てて如月は現れた。

「妃杏様！」

メチャクチャ焦つてる。

「モーターイン（モーターに現れてそのまま入室する）いつものパターンのマト）して下さればよいしこモノを…もししくは呼んで下されば参りますの」。

せりやせりなんだけどね。

しかも如月の部屋にアタシが現れるなんて初めてのコトだから。

『アタシが来たかったの』

ちよつと弱々しい笑顔で。

「は…、ハイ。」

アタシはストーンをギュッと握り締めたままズキズキしつつ、如月の部屋に初入室した。

「神楽様、気付いてらしたんですね。」

如月はほくそ笑んだ。

『ホントに如月達の関係が羨ましいよ。』

「ヒツー!?」

アタシの発言に、如月は容赦なく驚いていた。

初めて言つたからね。

『自分では“もちろん言いません”とか、アタシにだつて言つたつて言つてたんだけどね。自分で笑つてたよ、“迂闊でした”つて。きっとそんなコト忘れちゃうくらいに真剣だつたんだね。』

何とも不器用な神楽らしいね。

『人間、自分のコトはまるつきり鈍感だけど、人のコトには敏感なんだって言つてた。』

「そうでしたか。」

照れ臭そうな如月。

卷之三

如月の目の前にアタシは握り締めたままの右手を差し出した。

- H ツ ?

ホカンとする如月

手を出して?』

ポカーンとしたまま言われるがまま手を差し出した如月は、アタシが手を開いて、ストーンを如月の手に乗せてアタシの手を引いた瞬間、とてつもなく短く絶句に程近い声で驚いた。

『アタシが行けない代わりに、マウンテンにカケラでもイイからアタシの分身として持たせたいってお願ひして頂いたの。大事にしてね。』

アタシの目にも、如月の目にも、うつすら涙が浮かんでいた。

「ありがとうございます！――」

アタマを深々と下げて、声にならない声で叫んだ。

たまらずアタシはアタマを下げるままの如月に抱き着いていた。

『大丈夫、こっちにはbossも神楽もいるし、何てつたってストーンが一緒なんだから。』

そう言って。

如月は翌朝、過去へと一人、旅立つた。

♪第4章♪ with out you

皇女に正体不明の物質のコトを話せたのは、判明した翌日の夜だった。

と言つてもアタシの口からでは無く。

お母様に言われたの。

“「今回、皇女からの御依頼で妃杏達が調べたコトはワタクシから皇妃に話します。その上で、結果は皇妃から皇女に話してもらうようワタクシが伝えますから、妃杏は皇女が言つてくるまで黙つてなさい。」”

つて。

アタシは何も言わず受け入れた。

だって、下手にアタシが話して、皇女の気持ちを逆撫でなんてしちやつたらと思うととてもじゃないケド言えないよ。

“皇女の言つ通り、実はみんな気付いていた”

なんて、デリケートなコト言えるワケ無いよ。

だからお母様の言つ通りにして、お母様にお任せするコトにしたの。

アタシはただひたすら如月の無事を祈つて。

もちろん、如月が過去にいるコトはウチラダケの秘密だよ。

あくまでも如月はまだ休暇中。

そりゃいへりなんでも言えないよ。

そう言えば、bossに如月の気持ちがバレちゃった時、真っ先に弁明したのは神楽だつたそуд。

“「上司のワタクシが手本になつてないのでワタクシの責任です！」

つて、深々とアタマを下げたらしく、さすがにbossも笑うしかなかつたつて。

如月が言つてた。

“「ホントに神楽様にほどいまでもアタマが上がりません。」

つて目を細めながら話す如月もまた、カッコよかつたな。

アタシまで嬉しくなつたしね。

ホントに部下想いなんだね、神楽は。

アタシはどこまでも周りに恵まれてんだなつて思つ。

神楽の言つ通り、確かにアタシは誰よりも護られてるのかも知れない。

「如月は無事に到着したようですよ。」

神楽が現れた。

空いてる時間はずつヒューマンで如月のコトを見守つてあげてる神楽。
アタシと神楽とのロマンのPPから逐一如月の行動をチェック出来
るようにプログラムしてくれたみたいで、アタシも気になつて、暇
さえあれば見ている。

今は公務でずっと見れなかつたから、気にはなつていたんだ。

ソレを見計らつてか、神楽が教えてくれた。

「アッシュには強力過ぎる御守があるから大丈夫ですよ。『安心下さい。』

うわああああ…。

久しぶりだワ、神楽の“『安心下さい』光線！！

神憑り的なパワーは未だ衰えず。

地球にいた時はしおりちゃんの光線にヤラれてたケド、じつに
来てからは『無沙汰だつたから、久しぶりに見ると通常の何万倍も
強力に見えるワ。

『皇女の為つて言つ、田には見えない凄まじいパワーも如月にはあ
るからね。』

アタシは微笑ましくなつていた。

“誰かの為に”ってパワーは、計り知れない力を産み出すコトがあるって、何かで聞いたコトがあるから。

羨ましくもあるけどね…。

「それよりも心配なのは皇女です。それとなくマールス様にはお伝えしておきましたが。」

一転、暗い空気が漂う。

『アタシも心配です。如月が間に合えばイイんだケド、まさかそれはさすがにナイですよね。』

「ハイ…。一人ですからね。イントルードも何も使わないで一人で、と言つのは時間を要しますからね。」

神楽の表情が神妙だ。

リスクを最小限に抑える為、何も技術は使わない方がイイつてコトになつたの。

だから、如月の直接交渉しか頼れない。

“それでもイイ。無事に戻つて来られて、皇女の記憶から消えない為なら。”

つて、覚悟を決めてたよ。

今までの如月とは思えない程カツコよくて、男らしくて、潔かつた。

ほんの一瞬だけ、ドキッとしたもん。

「マールス様がおられますから大丈夫だとは思いますが。」

もう頼れるのはソコしか無い。

アタシと神楽や如月と違つて、皇女とマールスさんは皇女が産まれた時からの付き合いだ。

皇女のコトを誰よりも知つてるのはマールスさんだ。

だからマールスさんを信じるしかナイのだケド……。

氣掛かり、2つ……。

「妃杏、今から行つてもイイかなあ。」

夜、皇女のコトを思いながらぼんやり月を眺めていたら、皇女がモニターに現れた。

ギックリしてしまった。

『どうだ。お待ちしております。』

暗い雰囲気の皇后につられて、アタシまで暗くなってしまった。

「おうおう達も呼べるかな。あと妃姫ママにも。」

『ギヤード

如月は、

『かしこありました。』

まさか休暇中とは言えないよな。

皇女の依頼の真っ最中にノンキに休暇中ですなんて、言えるワケがない。

仕方無い、出張とでも言つておくが。

お母様とおおはすばに現れた。

神楽は遅れて登場。

如月の口調が気になるケド。

いつまでもここにしたまま。

「色々迷惑掛けで『メンね。ママから話は聞いたよ。妃杏ママにまで迷惑掛けてしまつて申し訳ありませんでした。』

「つらなく弱々しい皇女に、アタシは身が引き裂かれそうになる。

「とんでもありません。お役に立てず何と申し上げてよいのやら。」

お母様も恐縮氣味。

「ママに言されました。“皇家の人間である以上、まずは國のコトをお考えなさい”と。」

アタシはイッキに涙が溢れた。

ダムが決壊したように涙が溢れた。

と同時に兄様のコトや、自分のコトがアタマに浮かんだ。

皇家の人間だと血のコトを忘れて地球で何不自由なくアタシが暮らしている間、お兄様は皇家の人間であるにも関わらず継承権がなくもがき苦しんでいたコト。

当時のお兄様のお気持ちと、今の皇女のお気持ちが、違つぱつ同じなんじゃないかと思つて胸が苦しくなつて。

すぐに嗚咽に変わった。

「妃杏様、」

「妃杏様、」

お母様や皇女が声を掛けてくれる中、神楽がアタシの肩を抱き寄せて部屋から出るよつに促してくれた。

「失礼致します。皇妃様、boss、お願いします。」

「分かりました。妃杏をお願いします。」

アタシはまつに向いたままで、みんなの様子を伺い知るコトは出来なかつたけど、皇女の声がヤケにツラかった。

アタシは神楽の部屋にいた。

シンプルと言つか殺風景な部屋。

でもコーヒーの薫りが染み付いていて、何だかとつても落ち着く空間だった。

「大丈夫ですか？」

大きなため息をついて、アタシは落ち着かせながらゆづくつ話し始めた。

『“皇家の人間”つてコトバがどうじよつもなく胸に突き刺さったの。アタシがいない間のお兄様のお気持ちを考えてしまつて…。』

「そのお返しは、十分過ぎる程にならつたではありませんか。」

神楽の声がいつもに増して胸に響いた。

「しかも妃杏様はツラい別れと決断を経験なさつたんですね。」自身を責めるのはお止め下さい。」

“ツラい別れと決断”

確かにソレはそうだけど。

「大丈夫です。涙をお拭き下さい。皇女が心配なさつてますよ。」

顔を上げると神楽の眩しい笑顔があった。

『皇女の気持ちはアタシには分かりません。だけど、同じ皇家の人間なんだと思うと自分が情けなくて…。お兄様のコトも。』

涙はもう無かつた。

「大丈夫ですよ。」「安心下さい。」

ちゅうどん！！

“「安心下さい」パワー、恐るべし…。

涙がまた溢れたよ。

何も言つてないのに、神楽はジエルシートを差し出してきてくれた。

『ありがとうございます…、『いやこます。』

「後は如月に全てを託すまでです。」

そうだね、確かにそうだ。

氣を落ち着かせて、部屋へ戻った。

『失礼致しました。』

皇女はすっかり笑顔に変わっていた。

「ではワタクシは失礼します。皇女、『じゅつくり。』

お母様はアタシの表情を確認して退室した。

「ありがとうございました。』

皇女の表情は清々しかった。

「ではワタクシもこれで、『じゅつくり。』

bossも出ていった。

「では妃杏様、皇女とベランダへでも出られでは？。我々は『チラ
で待機しておりますから。』

神楽まで…。

マールスさんも笑顔で頷いてくれて、オンナ2人のトークは、明け
方まで続いたのだった。

如月のコトは気になつてたケド、皇女とのトークも楽しくて。

こんなにゆつくつ話したコト無かつたし。

アタシが地球にいた時の思い出話にもなつて、皇女が璃音に似てる
つて話もしたら、皇女も凄く喜んでくれて。

「妃杏はステキな経験をしたんだね。」

つて言った時の皇女の顔が印象的だつた。
どことなく切なそうで…。

でもアタシだつて皇女が羨ましいですよ。

“恋してる”んだから。

「妃杏様！妃杏様！－！」

ん？

ンンン？？

ひやあ！？

神楽が田の前に一

「おはようございます。お食事のお時間です。

『え、ひひ』

飛び起きたかったよ。

「お休みになつておられますか？」

「うわっ…むつ」とな時間なんだ…。

気が付いたらベランダで座つたまま寝てたよ。

『今日の予定は？』

寝ぼけ眼、全開爆裂！。

「本日はアカデミアと執務です。」

ふう。

ため息をついてみる。

『すべります。』

ゆくゆく立上がり

「かしこまりました。」

神楽は出ていった。

それにしてビックリした……。

まさか田の前にいるなんて……。

つてコトは何度も呼ばれたんだろうな。

ひやああああ。

ヘンな汗かいちゃったよ。

『遅くなりまして申し訳ありません。』

動搖を隠してみんなの元へ行った。

そう言えば昨夜から全然如月の様子見てないや。

後でチェックしないと。

まあ逐一チェックしているbiosや神楽から何も言われないから
何もないつてコトなんだろうナビね。

食後、さっそくアカデミアまでの間に如月に連絡してみた。

『おはよう如月。』

「おはようございます妃杏様。」

元気そうね。

安心。

「どうやら今はまだ侵攻前のことです。皇大王様にはまだ会えておりません。」

ふう。

道のりは長いな。

相手は皇女のお祖父様の現皇大王なんだから、当然アタシも神楽もbossもまだ生まれてない。

つまり如月は誰も味方がいない。

やつぱり条件、キツ過ぎたかなあ。

「イグアス星にも行つてみますね。」

とつてもいい顔の如月にひと安心。

じゃ、アカデミアに行きますか。

．．．．．

ん？

ストーンが光ってる。

どうしたの？？

心臓が自然と速くなる。

何だろ？？。

『失礼します。』

一旦退席。

「如月に何かあつたんでしょうか？？」

神楽も不安そう。

PPで状況をチェックしてみよう。

ん？

ンンン？？？

繫がらない？。

如月をキャッチ出来ないよ？？？。

どうこいつ！？

神楽の表情にも緊張が走る。

アタシはアカデミアを早退して、神楽とbossルームに急いだ。

当然気付いたbossは、懸命に処置をしてくれてるんだけど…。

突然光が点滅に変わった。

イッキにイヤな空気が漂つ。

如月に何か起きてる…。

まさか身に危険！？

『行かなきや…』

黙つていられなくなつた。

「妃杏様はいけません。」

bossに止められる。

『行きますーー！』

アタシは突っぱねた。

bossに突っぱねたのなんて初めてだつた。

「妃杏様ーー！」

神楽の声が荒々しかつた。

『じゃあどうすればいいのよ……』

神楽の表情が曇った。

神楽に瞼みついたのも、琉冠星に来てからは初めてだった。

「現在原因解明と復旧を急いでおります。お待ち下さい。妃杏様はお部屋で待機なさいて下さい。」

険しい表情のbossに、アタシはおとなしく従うしか無かつた。

神楽に促され部屋に向かっていたけど、アタシは裏庭に進路を変えた。

部屋で待機なんて、今は無理だった。

神楽はbossルームに戻り、bossと原因解明に努めてくれている。

アタシはただひたすら祈つていた。

如月の、朝のあの笑顔を思いながら……、

如月の無事を。

イグアス星に行つたハズの如月なんだけど……。

“お願いします！如月の居場所をお導き下さい。”

ひたすら祈つた。

祈つて祈つて祈り続けた。

「妃杏様、□□にね出でだしたか。お身體に障ります、戻りましょ
う。」

神楽が迎えに来てくれた。

『“□□にお出ででしたか”って、一緒に来たじゃないですか。』

「いいえ。ワタクシはずっと妃杏様を捜しておりましたよ。』

あん?????????????

耳を疑つた。

『神楽様はり○ossと原因解明をなさつてたのではないですか?』

「何の原因解明ですか?しかも“神楽様”なんてお止めトセ!。ワタクシは妃杏様のエージェントなんですから。」

はあああああああああああああああ?

たまらず超変顔になる。

「どうかなさいましたか?御部屋に戻りましょう。』

いやああああああああああああああ！――！――！――！

撒母耳記上

アタシは悪い夢を見たんだよ、さつと。

でもアタシ、裏庭にいたよねえ。

今もいるよ。

まさかアタシ、裏庭で寝てんの！？

「如月は？」

「誰ですか？ソレは。」

とても冗談を言つてゐる雰囲気じや無かつた。

ダメだ、
気を失いそう…。

「うわ、もう少し歩く気にならんやつだ。

bossさえも如月を忘れている。

どうなつてんのよー体…。

まさか完全に迷子になつちやつたつての??

アタシはまたしても裏庭にいた。

□□しか居場所がない氣がして。

『如月…。』

涙が止まらなかつた。

ストーンは点滅したまま。

如月、ドコにいるの?

PPで如月の位置を改めて確認してみても、やっぱりサーチ出来ない。

氣がおかしくなりそつだよ…、如月。

このストーンの点滅は、きっと如月の異常を示しているんだと思つ。

だけども出来ない…。

どうしたらいイの?

プラチナムマウンテンに祈るしかなによ、もつ…。

“妃杏様……”

『如月！……』

如月の声だ。

ストーンの点滅が眩い光に変わった。

『如月いい……』

とにかく叫んだ。

『アーティルのー?』

姿が見えない如月に向かって。

「すいません、迷子になっちゃいました。もう戻れないです。」

如月の声が笑っていた。

『何言つてんのよ、帰つてくるつて言つたじやない。ストーンもあるんだから諦めないで！ストーンに祈つて！…アタシも祈るから。』

泣きながら叫んだ。

如月の顔が焼き付いて離れない。

「皇女とガイルが婚約しなきゃソレでイイです。」

如月…。

『ふざけないで！。それでもアタシのエージェントなの？そんな弱つちいエージェント、認めないわよ。』

考えるより口が先だつた。

「でも侵攻は防げましたよ。防いだと思ったら、時空の歪みにハマつちゃってドコにいるのか分かんなくなっちゃいました。お恥ずかしい限りです。」

『ちよつと待つて。』

アタシは猛ダッシュで部屋に戻り、皇女にコンタクトを取つた。

「どうしたの？妃杏。』

様子は至つて普通だ。

『皇女つて婚約者いましたつけ。』

息を切らすアタシにヒキ気味の皇女。

「いないよ、んなもん。何言つてんのー？』

笑い飛ばされた。

・・・良かつたあ。

『失礼致しました。』

6

再び裏庭に走った。

『如月いい！アンタは無事、任務を遂行したよ。皇女に婚約者はいなくなってるよ。』

「良かつた。ソレだけで十分です。」

『ふざけんじやないわよおおおおおーーーーーー』

涙が止まらない。

力の限り叫んだ。

その瞬間、マウンテンが神々しい光を放つた。

♪第5章♪ I miss you

目を覆う程の光が治ると、アタシは見知らぬ場所にいた。

周りは全て焼け野原。

赤茶の大地が広がる。

「妃杏様？」

はつーーー

『如月！ーーー』

声のする方を見ると、やつれた様子の如月がいた。

思わず抱き着いちゃった。

感動の再会。

『ストーンに祈りが通じたのよ。』

「妃杏様のお陰です。」

・・・でも、ヽヽ

どうやって帰ればいいの？

ＰＰで神楽にコンタクトを取った。

・・・取れない。

繫がらない。

気が遠くなりそうだ。

『アタシも迷子?』

再び泣き顔。

「妃杏様が来て下さって、力が出ました。ちょっとお待ち下さいね。」

そつまつてママをいじり始めた。

「誰かいるのか?」

はっ――――――――――

誰か来る!――!

何もない野つ原。

逃げも隠れも出来ない。

ウチらは無防備でただ立ひぬくしか無かった。

『か……ぐりっ?』

田を躊躇した。

神楽にそつくりな男性が、銃らしきモノをウチラヒに向かながら歩み寄ってきた。

「神楽様？」

やはり如月にも神楽に見えるみたいだ。

アタシの錯覚なんかじゃ無いんだ。

「イグアス星の生き残りか？」

『エッ！？』

「イグアス星？」

「」「イグアス星？」

『妃杏と申します。隣はエージェントの如月と申します。』

とつあえず一寧に挨拶してみた。

いかなる粗末にもまづは礼を尽くせとお母様に教わったから。

「見たトロロ、生き残りでは無さそうだな。」

顔はどう見ても神楽なのに、言葉遣いが神楽っぽくないのが不自然。

笑いそうになっちゃうよ。

『恐れ入りますが、ココはどこで、今は何年ですか?』

怖いもの知らずなアタシ。

「何を寝ぼけたコトを言つんだ、オマエは。気が触れたのか?ココ
はイグアス星。と言つてもたつた今我々が侵攻してサルミナ星にな
つたがな。今はエキ728年だ。」

あいけーなにいはち??

しかもサルミナ星がイグアス星を侵攻????

アタシも如月もあんぐり。

そんな年号、聞いたコトないよ?

「つかぬことをお伺い致しますが、今のサルミナ星の魔王様はどな
たですか?」

如月が尋ねた。

「オマエ達、魔王様のお知り合いか?」

どうしても神楽にしか見えない。

『シユナ皇…』

皇子じゃないよね。

『シユナ様やカルラ様は良く存じております。』

ホントなら、『シユナ皇子』と『カルラ魔王様』なんだけど、何せいつの時代が分かんないから敬称略で。

「なぜ祖魔王や祖魔王大王の名を知つておるのだ。」

また声がした。

アタシは心臓が飛び出そうになつた。

だつて、現れたのが

『如月……。』

なんだもん。

如月なんかコトバになつてないし。

「魔王様。」

こつおつさまああああああ？？？？？。

如月があ？？

イヤ、如月が魔王様なワケでは無いけどね。

でもなんで誰も如月と魔王様がそつくりなコトに気付かないの？

そう見えるのはウチらだけなの？

ん？

驚きのあまり、もう一つのキーワードを危なく聞き流すトロロだつた。

シユナ皇子やカルラ様が祖魔王や祖皇大王・・・と、言つ口トは・・・

「どうやら未来に来てしまったようですね。」

如月も察したようだ。

しかもとてつもなく。

『そりゃ迷子にもなるよね。。。』

時空、歪み過ぎだろ。。。

諦めを通り越して、ワクワクに達していた。

「ではルアナ様は?」健在ですか?」

如月が揚々としている。

「大お祖母様をご存知とは、何者だ。」

お・・・・ばあ、'、' 様あああ???

しかも、“大”?

クラクラしてきた。

『申し遅れました、ワタクシ妃杏と申します。隣はエージェントの如月と申します。』

「妃杏？」
「如月？」

皇王の表情が固まつた。

一
如用とは私の大お祖父様と同じ名だ。

『おとかアンタと皇女の孫?』

小声で如月に言った。

— そんなカンシですかねえ……？

かなり顔が綻ぶ如月。

「まさかその石はプラチナムストーンではありませんか？ だとしたらあなたは琉冠星の大魔王妃様ではないですか？」

アタシは驚きの表情のまましばらく固まってしまった。

“大魔王妃”が気になつたケド。

皇邸に連れていかれたアタシと如月は、かなりの賓客扱いを受けた。

何でも、魔王（如月の曾孫）が言つこな、やつぱり如月とルアナ皇后は結婚するらしい。

で、その何十年か後、シユナ皇子の御子孫が途絶えてしまい、ルアナ皇女の血筋の、魔王の父上（如月の孫）が継承するんだけど、

その頃イグアス星が結局サルミナ星を侵攻してくるらしい。

結構な長期戦になり、琉冠星が援軍に入り、しまいにはこのプラチナムストーンのお陰でサルミナ星が勝利したらしい。

何でも、アタシとプラチナムウォンテンが犠牲になつて助けるらしい。

だからアタシはかなりの英雄らしい。

だけどその影響で、琉冠星は自然消滅してしまつのだそ…。

かなりの衝撃だった。

で、その数十年後が現在で、たまたまイグアス星に偵察に来ていた神楽のそっくりさん（マリアスさん）のモニターがウチらをキャッ

チして、発見されたつてコトトらしき。

ウチらの時代でさえかなりイリュージョンな世界なのに、それからさらにイリュージョン度合いがパワーアップして、この時代の技術はイリュージョンをはるかに越えていた。

だから、ウチらが過去から来ちゃったコトに、誰も何の違和感も驚きも見せず、それどころかウチらを帰してくれる手配までしてくれるコトになつた。

まあ、この時代のサルミナ星の人達からしたらアタシは英雄以外の何者でもないだらうからね。

でも、フクザツ・・・。

琉冠星が無くなっちゃうなんて。

サルミナ星を助けた際のプラチナムストーンのパワーが強大過ぎて、パワーが暴発しちゃつて消滅しちゃつたんだって。

琉冠星のみんなは、寸前でそれ逃げれたらしいんだけど。

「いかにも妃杏様らしきですよね、身を呈して譲っちゃうんですから。」

用意された部屋で2人、未来の空を眺めながら話してた。

『如月、良かつたね。きっとこの努力は報われたんだよ。』

アタシは何よりそのコトが嬉しくてたまらなかつた。

もつ、アタシも如月むらの時代にはとっくに死んでる。

いるのは如月そつくりな子孫と、神楽のそつくりさん。

「マリアスさんて、誰の子孫なんですかね。どうみても妃杏様と神樂様ですけど…。」

如月の疑問は、アタシも感じた。

でも、もしそうならアタシの正体がバレた時に名乗つてきてもおかしくないよねえ。

『他人のそら似なんじやないの?』

አንተ የሚገኘውን በንግድ ስለመስጠት እንደሆነ ተከራክር ነው

「でも、ワタクシ達がこの時代に現れてしまつて、タイムトラップ
が起きてしまわないですかねえ。」

」の如月の疑問も、やっぱりアタシも感じてる。

いざ戻つたら、皇女と如月は結婚してなくて、神楽もアタシの婚約者でもなんでもなく・・・・・・

ひきつり顔で叫んでしまった。

「どうしたんですか妃杏様！！」

つられて取り乱す如月。

『アタシが如月と裏庭でシンクロした時、アタシ以外のみんなの記憶から如月が消えた。しかも神楽がアタシの婚約者じゃなくなつてた。』

メチャクチャ心臓が暴れてる。

「でもそれは我々が子孫に会つ前ですよねえ。大丈夫ですよ。」

如月がやたらとホンキに見えてくる。

『戻つたらどうなつてんのかな…。』

動搖しながらも、また空を見上げた。

「確認しますか？マリアスさんにでも。」

全然平氣をつけな如月。

そりゃそりだよね、自分と皇女が結婚してるとト知るんだもん。

『怖いからイイ。何だか神楽に逢いたくなつちやうし…。』

神楽に出逢つてからこんなに神楽と離れたの、初めてだから。

しかも神楽のいないトロロ。

そつくりさんはこるけど。

神楽、今頃どうじてるかなあ。

2度も継承者がいなくなつて、ロイヤルゲートはさわかし大騒ぎだ
うづね。

なんて、ノンキなアタシ。

帰れるコトが確実だから言つてられるんだろうけど。

「妃杏様、お時間よろしくですか?」

「うおっ！……！」

マリアスさんが現れた。

この時代はモニター越しの移動じゃなくて、直接の空間移動で現れる。

まずは立体画像が現れて、良ければ実体が現れる。

『ハイ。どうぞ。』

如月は今、魔王とお話し中。

しかし、ホントに神楽だよな…マリアスさんと。口々まで似るか!
?つてくらいに。

否応なしに笑顔になるよ。

「まさかこのような形でホンモノの妃杏様にお逢い出来るなんて思
いもしませんでした。」Jの惑星の救世主ですか？」

何だかテレちやうなあ……。

『アタシがやつたコトなのにアタシが知らないのもヘンな話だけどね。』

一ノトキササギ

「もしも今、同じような状況におかれたらどうなさいますか?」

根井で似てゐるかの感じにてへます。

『そりやサルミナ星が助かるなら、迷わず未来の自分と同じコトするよ。』

アタシのあまりのあつけらかんな態度に、マリアスさんは驚いているみたいだ。

何も言えないでいる。

アタシは嘘偽りない気持ちで続けた。

『だつてサルミナ星の危機は琉冠星の危機だもん。國を護るのは皇王の役目だから。』

さらにコトバを失うマリアスさん。

アタシは、何も言えないでいるマリアスさんの為に、今回、ウチら

が「コトにいるコト」の発端の話を始めた。

皇女とガイルの話、

“ サルミナ星の危機は琉冠星の危機 ” って話、

その危機がガイルの仕業だつてコト、

ソレを阻止しようと倫理を無視して、万全の体勢で無理矢理如月を過去に行かせたコト、

のハズなのに时空の歪みが出来ちゃつて、今に至るトコロまで。

マリアスさんはずっと黙つて聞いていた。

「 幼い頃、ワタクシの祖父より妃杏様のお話を聞いたコトがありました。 」

“ 祖父 ” か・・・。

何とも言えない不思議なカンジ。

「 ハコ 」 にいられないみたいだ。

地球上にいた時の逆の経験をしていく。

貴重過ぎるよな…。

「 “ お前の祖先には偉大なお方がいる。 その血筋を受けるモノとして誇りを持って ” と。 」

ん？

“祖先”?????

無数のハテナがアタシの脳を支配する。

と、言ひ口とは???????

アタシ、目がテン。

「祖父から聞いていた通りのお方で、安心しました。こんなにお若いので“お祖母様”なんて口すいらしゃませんね。」

ぴやああああ…。

やつぱりわつかああ。

聞きたくなかったな。

今度はアタシが黙り込んでやつた。

でも、聞いとくか。

『アタシがいなくなつた後、神楽はどうなつたの？アタシのパートナーなんだけど。』

このくらい聞いたってバチは当たらないよね。

アレ？

マリアスさん、また無事になつたやつたよ？。

「…存じません。」

やつと口を開いたかと思つたら、いつ向いて呴くよつに発した。

エッ？

何かおかしいよ。

「ワタクシは失礼致します。お時間を頂き、ありがとうございました。」

エッ？

「マリアスさんはそのまま消えていった。」

如月が戻つて来た後、アタシはマリアスさんの様子を話した。

すると如月からも不思議な答えが帰つてきた。

「ワタクシもせりげなく聞いてみたんです、マリアスさんの祖先は誰なのか。ところが誰も答えてくれませんでした。知らないようですね。」

ますます怪しい。

何で神楽を知らないの？

「妃杏様より早死にするんですかねえ。」

如月は縁起でもない物騒なコトをサラリと呟いてのけた。

だけど、やうとも勧えられる。

にしてもあの様子はおかしこよ。

確實にただならぬ空氣だったもん。

『やつぱり神楽じゃなくなるのかなあ、アタシの婚約者…。』

自然と涙が出ていた。

「んなワケないじゃないですかーまた暴走しますよ妃杏様ーー！」

如月は笑い飛ばしてくるケド…、不安になるよ。

そりゃアンタはイイわよー！

・・・なんて、言いたいケド言えない…。

神楽・・・。

モーレツに逢いたいよ。

いつもみたいに飛んできてる。

“『ハサ心ヤセコ』って言つてよ。

ダメだ、涙が止まらない。

如月は優しくそっと肩を抱いてくれた。

神楽みたいに…。

翌朝、目覚めると向やうただならぬ雰囲気を感じざるを得ない状況に陥ってしまった。

“「明朝に元の時代にお帰り頂けるように準備致します。」”

つて言られてたのに、食事の時もその後も何も言われてない。

みんなの様子が尋常じゃなく、険しかった。

しかもマリアスさん（厳密に言つとアタシの場合），“さん”はいらないんだろうケド。）がいなくて。

聞くに聞けない雰囲気の中、1人お氣楽如月は何の迷いも見せずに聞いていた。

「マリアスさん、どうしたんですか？」

あまりの如月の無防備っぷりに、アタシはコトバが無かつた。

「無断で過去に行つてしまつたようだ、タイムホイールが出来てしまつてゐる為、妃杏様達の『帰還に影響』が出てしまつてゐるんですね！」

心臓がカラダを突き抜けた…。

どうして？

涙がなぜだか込み上げてきた。

呆然とするアタシ。

むしろ軽い放心状態。

マリアスさん・・・。

自分達が帰れないコトはどうでも良かつた。

過去に行つてどうする気なの？

昨日の憂慮の表情と関係あるの？？

如月は皇大王（如月の孫）を呼び出し、物凄い剣幕で問い合わせた。

アタシは未だに放心状態。

「妃杏様と神楽様の、いじ子孫がどうして皇家に支えてるんですか！」

止めて如月…。

胸が苦しくなるよ…。

皇大王の反応はウチらも驚くほど意外な表情だった。

「マコアスが妃杏様の子孫？？？」

周りの人達もざわつく。

「ホントに知らなかつたんですか？」

如月、かなりキレてる。

『如月…。』

さすがに慌てて止めに入る。

「神楽様と言つのは、妃杏様どどのよつなじ関係のお方ですか？」

「えつ？」

如月は声に出して、

アタシは声にならずに驚く。

無性に嫌あゝな胸騒ぎが起きてる。

「何で神楽様を知らないんですか？妃杏様のパートナーで、皇妃王様なのに。」

今までにナイ程にアツくなる如月に、アタシはただただ泣き続けるしかなく…。

「申し訳ありません、そう言えば妃杏様の『家族のコトは聞いたコトがありませんでした。てっきり途絶えたモノだと…。』

メチャクチャバツの悪そつな皇大王。

アタシはとにかくワケが分からなかつた。

神楽を知らない？

アタシが有名なのに？？？

しかも神楽に限らずアタシの家族まで！？

マリアスさんの様子もおかしかつたし。

「もしかして…」

皇大王のSPのジユラさんが神妙な顔で呟いた。

イッキにみんなの視線が集まる。

「前に一度だけ、マリアスがレジスターの丘にいたのを見たコトがあります。なぜいたのか、何をしていたのかは伺い知りませんが……。」

「レジスター? ? ?」

如月の声が恐ろしい程にキレていた。

～第6章～幾千の哀しみを乗り越えて

アタシは氣を失つてしまつていたみたいだ。

あまりにも理解出来なさ過ぎて。

アタシが氣を失つていた間、魔王と如月はレジスターの丘に行っていた。

レジスターの丘は普段は誰も近寄らず、入口も“開かずの扉”と化しているらしい。

田が覚めた時側にいたのは皇后妃だった。

皇后妃がレジスターについて話してくれた。

「ワタクシも聞いた話ですので自信はあまりナイのですが…」

と前置きした上で。

琉冠星が消滅した後、神楽達の消息は途絶えてしまい、誰も知る口トは無かつたらしい。

その後何十年か経つて、突然何者かにサルミナ星が攻撃されたらしい。

ソレがレジスターらしいんだけど、たった一人で攻め込んできたそのレジスターは、たった一人でサルミナ星に立ち向かった後、あのレジスターの丘で最期を迎えたらしい。

1人で闘い抜いた殊勲を讃えて丘にそのまま埋葬され、そこはそのまま誰も立ち入らなくなってしまったと言つコトだつた。

そのレジスターニアが何のために1人で攻め込んできたかは誰も知らないらしい。

アタシは何だかとてもなく嫌な胸騒ぎを隠せなかつた。

『丘に、連れて行つてもうえますか?』

起き上がり、皇后妃を見据えて言つた。

行くと如月と魔王はもういなかつた。

何とも言い様のない不思議な空氣。

静寂

混沌

狂氣

憂慮

この世の全てを包み込んでいるかのような空間。

アタシはてつぺんに立つて、そのまましばらへ田を開じていた。

ストーンを握りしめて…。

何か聽こえて来ないかなと思って。

アタシ、もしかしたらレジスターニアって神楽なんじやないかって思うの。

だからもしホントに、レジスターニアが神楽だとしたら、口々にいれば何が分からぬかなと思つて…。

しばらくすると如月が現れた。

「どうかなさいましたか？妃杏様。」

『何か分からぬかなと思つて。マリアスさんは？』

アタシの問いに、如月は黙つたまま首を横に振つた。

ダメか…。

神楽…。

マリアスさん…。

2人のコトだけを考えて、それからどのくらい経つだらうか…。

ストーンから一筋の光が放たれた。

光は丘のある場所に延びた。

アタシはすぐさま光の射す場所に走つた。

行つてすぐに、ストーンからまた光が放たれた。

『マリアスさん！』

何故か光からマリアスさんが映し出されている。

「妃杏様？マリアスさんいるんですか？」

『え、っつー？』

『見えないの？』

嘘でしょ？？

「妃杏様にしか見えません。ワタクシがこの場所にプライベートレターを埋め込みましたから。」

『ふらいべーとれたー？？？』

レターってくらいだから手紙だよねえ。

如月はどうしていいか分からず狼狽えている。

「妃杏様…、大お祖母様がコレを見つける頃、ワタクシは過去におります。」

コレはリアルタイムじゃないのか。

背景、じいじっぽいぞ？？。

「わざや皆様大混乱でしょうね。」

当たり前だよ。

「大お祖母様をお帰しするどいろの騒ぎじゃなくなつているかも知れないコトは、謝つても謝りきれません。ただ、先程大お祖母様のお話を聞いて、我々の運命にケリをつける覚悟が出来ました。」

“我々の運命”って???

もしかしてやつぱりそつなの?????

アタシの心拍数は限界を迎えていた。

「ハハニコリしたと恤ひコトは薄々は御承づかだと思こますので、お話しあります。」

聞きたくない…。

でも聞かなきゃいけないんだと思つ。

どんなハードロックよつべヴィメタルよつも、今のアタシの心拍数の方が速いよきっと…。

倒れなじように、前もつて座つた。

「神楽様は…、ハハニ開ておひります。」

unbelievable…

気が遠くなるよ。

たまらずアタマを抱えた。

「妃杏様？」

如月が声を掛ける。

とりあえず手を上げて応える。

感情がコントロール出来なくて、涙も出ない。

何も考えられない。

「大お祖父様は御家族と地球に移住なさいました。妃杏様との想い出の地球をお選びになりました。今現在ワタクシの家族も地球にあります。トコロがある時お一人でサルミナ星に攻め込んで来ました。妃杏様を喪つた哀しみがどうしても癒えなかつたようで…。」

そんな・・・。

涙を出すコトも出来ない程ショック。

神楽がレジスターだなんて・・・。

「家族には告げずに来たそうですが、サルミナ星に何者かが攻めてきたと聞いた時、すぐに分かつたそうです。その後我々が子孫だと

「レジスターも、神楽様だと『レジスト』も一切知らないまま過ごして参りましたが、ワタクシはどうしても納得がいかず、このサルミナ星の皇家にお仕えし、大お祖父様の気持ちや、大お祖母様の護つたこの星を確かめようと思いました。あわよくばいつか大お祖父様の仇をとも考えていました。」

「マリアス……さん。。。

衝撃が強すぎてアタマがガンガンする。。。

処理し切れないよ。。。。

「ですが、あんなに嬉しそうにお話しなさっている大お祖母様を見て、だつたら神楽様に攻め込むのを留まつてもうおつと決めました。ですのでワタクシは神楽様を止めに参ります。」

ソコでマリアスさんは消えた。

心拍数はまだMAX。

だけど不思議と苦しさはなかつた。

そばに神楽がいるから?

この下に神楽が眠つているのかと思つたら、不謹慎な話だけどモーレツな安心感がわく。

アタシはたまらず寝転がっちゃつた。

「妃杏様?御加減優れませんか!?」

メチャクチャ慌てる如月。

『この下に神楽が眠ってるの。マリアスちゃんはレジスターを止めに向かつたわ。魔王に伝えて……アタシはココにいるから。』

空を仰ぎながら如月に伝えた。

如月はさすがにコトバになつて無かつたケド、とうあえず無言のまま魔王の元に向かつてくれた。

時空の歪みつて、こんなメチャクチャなモノなの？

そりや“時の迷子”は戻つて来れなくもなるよな……。

アタシも今、正直帰りたくないモン。

「妃杏様！！」

魔王が現れた。

「マリアスの居場所を突き止めました。妃杏様も参りますか？それとも元の時代にお戻りになりますか？」

ドキ　　ンーーー！

せつかく治まつた心臓がまた暴れだす。

どうしよう…。

ビーヴィしたらイイの??

アタシが直接神楽を説得?

だけどそんな神楽を見たくない。

だけビーマリアスさんや遺されたみんなの「トトを想つたら、行くしかないよね…。

神楽、ビーヴィいたらイイの?

アタシが行つたら思い止まつてくれる?

でもいるハズのないアタシが、しかも過去のアタシが行つても思い止まつてくれる?

この下にいる神楽に向かつて…。

でもこれでマリアスさんのトコロに行つたりやつたらビんだけタイムトラップしまくつてんだらう。

元の時代に戻るの怖いなあ…。

!-----!

そうだつつつ、ビーヴィせなら行つちやうか!!

“なりません!!”

んんんんんんんんんん？？？？？？？？？？？

何今の！――！――！

神楽の声、、、だよねえ。

神楽？？？？？

どつちの神楽？

この下にいる神楽？

それとも過去の神楽？？？

『神楽様？？？？？』

アタシは叫んでいた。

“ワタクシは後悔しております。1人でいるコトに疲れただけで
す。”

涙が溢れていた。

この下の神楽だね。

“マリアスに説得されても恐らくワタクシは同じコトを言ひでしょ
う。ですからマリアスも直に戻るでしょう。どうぞ妃杏様もお戻り
下さい。ワタクシが待ってますよ。”

神楽……。

たくさんのアタシの涙が神楽の眠る畳に染みしていく。

『何もレジスターーアになる必要は無かつたじゃないーアタシのしたコトが無駄になっちゃうでしょ？神楽らしくないコトしないで！！だからアタシは神楽を助けに行くよ。2人の大事な家族に囮まれて暮らしてよ。ねつ？お願ひ！神楽…。』

泣きながら訴えた。

神楽からの答は何も無かった。

『アタシも行きます。』

涙を拭いて、魔王の元に向かった。

神楽を助ける為に…。

マリアスさんのデータを元に着いたのは、ちょうど修羅場真っ最中の2人の場面だった。

『神楽…。』

神楽の顔は鬼氣に溢れていた。

足がすくむ。

涙で姿がボヤけて見える。

神楽が2人いるようにしか見えないよ……。

「妃杏や……、ま?」

かなり驚いている神楽。

そりゃそうなんだけどね。

「妃杏様! 皇王様も! ……」

マリアスさんも驚愕。

『まづそうな顔して。

神楽はすっかりお祖父ちゃんになっていた。

でも涙が込み上げていた。

さつき、下に眠る神楽に言つたコトバを叫んだ。

すると神楽は絶句。

緊迫した空気が流れれる。

「自分のコトしか考えず、申し訳ありませんでした。何ともお恥ずかしい限りです。」

神楽は笑顔になっていた。

良かつたあ…。

その場に座り込んでしまった。

「まさか口々に来て過去の妃杏様と未来の子孫にお会い出来るとは思いませんでした。それだけで十分です。帰ります。」

神楽は穏やかだった。

「神楽様!!」

「如月様!」

『如月?』

いつの間にか如月が来ていた。

「様なんてお止め下さい。神楽様に様呼ばわりされるのは性に合いません。」

照れまくりの如月。

そつか、この時には如月は“様”なんだね。

皇女の旦那様だからね。

ちょっと感傷的になる。

「コレ、ワタクシにはもう必要ありませんから。神楽様がお持ち下さい。」

そう言って如月はストーンのカケラを神楽に渡した。

『如月…。』

ちょつとウルウル。

驚き硬直する神楽。

「御守りです。」

如月の笑顔はサイコーに輝いていた。

神楽はその後地球に帰つて行つた。

「じゃ、ワタクシ達も帰りますか。」

如月もアタシもスッキリしていた。

思い残すコトもなく。

帰つたらどんな状態になつてるかとか、全く気にならなくなつていた。

むしろ、楽しみだった。

“どんな未来が待っているんだろう”

じゃなくて、

“どんな過去が待っているんだろう”

つて、とつてもおかしな気分だけだ。

神楽、どうしてるかなあ。

「神楽様、今頃寝込んでんじやないですか？」

茶化す如月。

神楽に逢いたい。

『帰ろつか。』

「ハイ。」

『帰つたら如月は如月じゃなくなってるのかなあ。』

アタシ、呟いた。

「妃杏様…。」

ちょっと寂しいね。

如月の幸せはもちろん嬉しいよ。

だけど、

“妃杏様がいてマネージャーがいてワタクシがいる。最強ですね。”
ずっと続くと思つてたのにな…。

「我々が戻る頃はまだ皇子が継承権をお持ちなんですから、まだ大丈夫ですよ。そう簡単に妃杏様のマネージャーは渡しません。」

『如月…。』

微笑む如月が、頬もしかつた。

「でも、神楽様はやつぱり最後まで妃杏“様”なんですね。」

如月…。

まさかアタシがそのコトで歎んでたコト、気付いてたの？

モーレツにビームを飛ばした。

「だから神楽“様”って呼ぶよつになさつたんですよね。皇女とお話なさつてる時も、切なそうな顔をなさつてましたから。」

涙が出そうだった。

『神楽は何が起きてもきっと一生アタシは妃杏様なんだろうなつて気づいたの。だから開き直るしかないかなと思つて、じゃあアタシが同等に見ようと思つたの。』

改めて言つのは照れくさかつた。

「神楽様の生真面目にも困つたモノですね。女心がまるで分かってないんですから。」

ふつつつ…！

如月が言つとおかしくて笑つちゃつよ。

でも確かに如月は神楽よりは遙かに分かるかもね。

『神楽にタメ口止めりつて方がムリだよ。それこそ寝込むんじやない?』

2人で顔を見合させて笑い合つた。

敬語でもタメ語でも神楽は神楽だ。

アタシの婚約者だ。

・・・・・・・・

イヤ、違うかも…。

やつぱり帰るの止めようかなあ ・・・・・

「でも妃杏様? タイムトラップは、歴史をいじつた時に出来るモノですよねえ。今回ワタクシは歴史をちょっといじりましたが、その後の出来事は歴史ではなく未来のコトですから何も変わらないので

「はいですか？」

おひひ？？？

……………、やうだねえ。

はひひひ……！

『じゃあみんな如月を忘れたままの過去に戻るひでのっ。』

アタシは叫んでしまった。

「ワタクシは皇女と結婚するんですよ~。」

……………やうだつた。。。。。

「ひひひ！」

神楽もアタシの婚約者じゃなくなつてゐるのに二人の子孫は確かにいた。

やうぱり向うかのトラップが発生してゐるやぢや……。

「どうあれ帰つましょー行けば分かりますよ。」

つたく……

何なのよ、人が心配してゐる隣で……！

自分は結ばれるつて分かつてゐるからつて早く帰りたいもんだからつ

て…。

顔が尋常じやない程にほころんでるよ。

確かにアンタの言つ通り、“行けばわかる”かも知れないけどさあ
…。

はああああ。

深く大きなため息。

やつぱり歴史はいじっちゃダメなんだね。

つづづく痛感…。

約一人浮かれてるヤツはいるケド…。

どうせなら神楽のアタシに対する接し方が変わってくれたらいい
のにな…。

さつき“敬語でもタメ語でも神楽は神楽だ。”って言つたばっかり
なのにね…。

はあああああああ。

また深い大きなため息が出ちゃうよ。

「大丈夫ですよ。きっと大丈夫です。」

如月の笑顔が珍しく眩しく見えた。

～第7章～ remember me

プラチナムマウンテンの前に着いた。

と雪の「トトロはアタシが光に導かれて如月と合流する前?

「お部屋に戻りましょう、妃杏様。」

如月に促され、ゆっくり歩いて戻った。

2人とも無言で。

如月もきっとドキドキしてるんだわ。

何も変わってなきゃイイけどな。

みんな、如月のコト分かつてるよね?

また“誰?”なんて言わないよね。

緊張する。

心臓、飛び出しちゃう…。

如月がずっと手を握ってくれている。

“きっと大丈夫ですよ。”

つて言ってくれてる気がした。

田の前から神楽が来た。

迎えに来てくれたの？

「何やつてんだよ如月！さっさとセンターホールに行け！…って何でオマエマネージャーのステッス来てんだよ。最後だからって…。」

ん？

神楽は如月のアタマをこついた。

何だか神楽、雰囲気違くない？

何だかフランク…。

で、“何でマネージャーのステッス来てんだよ。”

つて、どー言ひコト？？

如月はマネージャーだもん、マネージャー用の黒と白のステッス着て当然じゃない…。

アタマの中軽く混乱。

そして胸騒ぎもある。

如月もぽかんとしながらも走り去つて行つた。

ん！！！！待てよ??????神楽、もしかしてアタシにも…。

「妃杏様も参りましょう。如月の儀式の準備をしなくてはなりません。」

ダメか・・・。

やつぱり“参りましょ。”だつたか。

ちよつとガッカリ。

“敬語でもタメ語でも神楽は神楽”

つてせつを言つたばかりなのにな。

どつせ変わるなら「口が変わつて欲しかつたな。

つて、あれつ？？

『如月の儀式つて、何かあつたの？』

皇女との婚約？

「何をおとぼけになられてお出ですか？如月の遠古の儀式ですよ。妃杏様もお着替なさつて下さい。」

た、いかん?????????????

『どうしてー？』

すっとんきょううな声を上げてしまった。

「妃杏様、おかしいですよ。如月は今日で退官ですよ。サルミナ星に婿に行きますからね。」

そんな・・・。

『だつてルアナ皇女には皇位継承権が無いからサルミナ星に嫁ぐ必要はないんじやないの?』

“まだ皇子が継承権をお持ちなんですか?”

つて言つた時の如月の顔が浮かんでいた。

やっぱり如月と離れちゃうの?

ヤだよ・・・。

「妃杏様!どうかなさいましたか?先程からまるで何も御存知ナイ
ないかのような発言ばかり…。サルミナ星の次期皇位はルアナ様で
すよ?」

はいいいいいいいいい??????

目が思いつきりつり上がつっていた。

“何も御存知ナイかのような”つて、御存知ナイよ…!

『シユナ皇子は?』

「シユナ皇子は弟君ですから継承権はナイですか。妃杏様、

脳に何か衝撃でも受けられましたか?「

そりやせりあから衝撃受けっぱなしですよ。

神楽が言つてゐるのと意味はだいぶ違つケド…。

あれつ?…せう言えば…。

『如月つて、どうして阻止したの?』

歩きながら神楽に尋ねた。

「妃杏様?…さつきから一体どうなさいたのですか!」

ん?

アタシ、もしかしていなくなつたコトになつてない?

迎えに来た時も至つてフツーだつたね…。

“「妃杏様ああああ」”

つて、“感動の再会”的なモノもちつとも無かつたし…。

『何だか時差ボケしちゃつてるみたい。』

「時差ボケ?ですか?どこかに行かれたのですか?妃杏様やはりおかしいですよ?妃杏様はずつとあの場におられたではないですか。如月は、1人でイグアス星に乗り込んで皇女とガイル様の婚約を解消するよう話を付けて來たのですよ。」

ふ

ん。

そうなってんだ…。

やつぱりアタシがいなくなつたコトは変わつてゐみたいだね。
実際、如月がどうせつて阻止したかは聞いてなかつたから何とも言
えないね。

じゃ如月が過去に行つたのも違つてるのか？

『でも良くそれで婚約解消出来たね。』

さりげなく聞いてみる。

「妃杏様が如月に託して下せつたストーンのお陰です。妃杏様のパ
ワーが通じたんですよ。」

なにい？？？？？

歴史がかなり入り乱れてるぞ？？

じゃあ如月が阻止出来たトコで終わつてるつてコトー…？

如月が迷子になつたトコから逆えてる（変わつてる）つてコトー…？

・・・みたいだね。

にしたつて、シユナ皇子がルアナ皇女の弟つて、そい、変わる意味

あるか？？？

イヤ、ナイだら…。

そのせいで如月と別れなきやいけないんだよ？

『じゃ、アタシのマネージャーは？』

アタシの質問は、とんでもなく奇っ怪だつたよつで、冷静沈着な神樂の顔色を一変させてしまった。

「妃杏様？」ちょっと脳波を診てみますか？」

アタシ、そんなにへんな口ト聞いた！？

「妃杏様のマネージャーはもともとワタクシではありませんか。」

あん？？？？？？？？？？

『神楽は皇妃王教育があるから如月にマネージャー変わったじゃない…。』

嫌あ～な雰囲気だぞコレは…。

神樂の顔色が急速的に赤くなる。

神楽とは思えないほど取り乱している。

「なぜワタクシが皇妃王教育を…そんな恐れ多いにも程があります。何をお戯れになつておられますか…！早く戻りましょ～う！…！」

神楽、尋常じやなくうろたえてる。

何だかやつぱり嫌な予感。

核心につくのはさすがに怖かったから、その先は聞かなかった。

如月の記憶がみんなから消えてなかつたコトをヨシとして。

部屋に戻り、アタシは着替えを済ませ、センターホールに向かつた。

如月が退官 . . .

戸惑つているのはもちろん如月も同じだった。

アタシが入室するなりアタシに駆け寄つてきて、嘆いてる。

「どうなつてんですか？皇女が継承権つて . . 」

『しかもどうやら如月がアタシのマネージャーだつたコトも変わつてるみたいだよ。』

「何でこんなコトに。 . . 」

如月、泣きそづ。

『何で顔してんのよ、今から如月の晴れの舞台が始まるんだから。』

アタシは出来る限りの笑顔で言つた。

内心、かなりフクザツだけど…。

退官するHージョントは、退官式はローブが着る色である、全身黒のスーツを着用する決まりがある。

デザインにちばうのモノとは違つモノの、何だか物凄く凜々しく見えるよ。

『カツコトイよ、如月。』

田の前の如月の姿が涙でにじんでいた。

「妃杏様…。」

田を潤ませる如月に、思わず抱きついた。

たまらなく愛おしく思えちやつて。

「何だかフクザツです。」

弱気な如月。

『胸張りなさいよ。如月が幸せならいいから。今までアタシに一つぱい込してくれたんだだからこのくらいバチ当たんないよ。』

アタシも確かにフクザツだけどね。

如月の男泣きは、とってもステキだった。

式の最中、如月はずつと泣いていた。

何だか実感湧かないな、如月がいなくなるなんて…。

今までの如月との思い出が溢れ出していく。

でも、如月にとつてはウルトラスーパーハッピーハンドなんだよね。

だから笑顔で送らなきゃいけないのに、

涙が止まらなかつた。

「妃杏様…。」

声を掛けてくれた神楽は、今までの神楽じやナイ。

ただのマネージャー。

それも涙の原因に、少しあは絡んでいる。

別れてないのに別れちゃつてるみたいで。

「ヒージョントとしてはAランク止まりだったが、この上ない大出世が出来て、上司として誇らしく思つ。オマエはヒージョントの誇りだ。退官おめでとう。」

神楽が如月に掛けたコトバがアタシと如月には違和感炸裂だった。

如月は“アランク止まり”なんかじゃないよ…！

マネージャーに上がつたじゃないーー

アタシは心の中で叫んでいた。

式の後、アタシは部屋に戻った。

現実に堪えられなくて。

如月のお別れパーティーが行われている中、体調が優れなくて帰つて来ちゃった。

如月も顔色が悪かつた。

如月も抜けたくて仕方無かつたみたいだケド、さすがに主役は抜け
れないよね。

ゴメンね、如月。

アンタはまだいいよ。

皇女と結ばれるんだから。

! ! . ! ! . ! ! . ! ! . ! ! . ! ! . ! ! . ! ! .

もしかして！？

如月が皇女と一緒になれる分、アタシが神楽と離れたってコト！？

だってアタシと神楽はストーンが導いてくれるんじゃないの？？？

これからなのかなあ…。

ビビしたらイイんだ？アタシ。

ストーンを見つめていた。

やつぱり過去は変えられいけないんだな。

マリアスさん、大丈夫かなあ。

でもアタシのパートナーが神楽じゃなくなつたら、マリアスさんも
マリアスさんじゃなくなるのかなあ…。

アタシが見た未来は、確かにアタシと神楽は結婚してたのに…。

やつぱりこれからなのかなあ。。。。。

不安でたまらない。

考えれば考える程、吐きそり…。

ダメだ、少し休もう。

「妃杏様。」

田覚めると、目の前に神楽がいた。

「お加減：いかがですか？」

珍しく弱気な神楽だ。

アタシは何も言えなかつた。

あまつこむじごくせんじゆせし過ぎていて。

如月は?

整理が付かず、ボーリ然とした状態で尋ねた。

「如月もどうやら具合が優れないようで、早めに終わらてしまいま
した。」

そりやそりだ。

沈黙の空気が流れる。

「如月と妃杏様、何かあつたんですか？」

そりゃあつたよ、大アリだよ。

話してもいいこともなことアレだケドね。

アレは、 “過去の話” になるの？

それとも “夢の話” になるの？

涙が出ていた。

「妃香様？」

動搖する神楽。

ホントに覚えてないの？？神楽あ…。

アタシは気持ち、変わらないのに…。

やばっ！涙止まらなこよ。

「妃香様…！」

ますますあたふたしてこの神楽。

「ユーリー、お持ち致します。」

いるに堪えなかつたのか、神楽は出でこつた。

アタシは無意識のうちに、またストーンを見つめていた。

どうひきかやつたの？

ビリヒたらイイの??

ストーンに問いかけて。

「妃香、いいか?」

お父様!?

慌てて涙を拭う。

『どうだ。』

アタシ、あたふた。

「神楽がいたんじやないのか?」

キヨロキヨロするお父様。

『コーヒーを用意して参りました。お父様の分もお願いしますね。』

ん?テジヤヴか???

ちゅつとだけ違うケド。

『お父様にもコーヒーをお願いします。』

「かしらまつました。」

何のためらうもなく即答。

「気分は大丈夫か？」

アタシの顔をジッと見ていく。

目を見られちゃ泣いてたコト、モロバレだよね。

『何とか…。』

『まかしても』『まかし切れないのに、うつ向いて答える。

「失礼致します。」

神楽登場。

やつぱり『ジャヴだよな。

「神楽も座れ。」

ん？

「失礼致します。」

何？？

新たな展開だ。

「しかし、如月は大出世だな。妃杏より先に決まってしまったのが
何だが。」

とか言いながら、嬉しそうなお父様。

「で、だ。」

おや？

アタシは無性にイヤな予感を感じていた。

お父様の表情が物言わぬ何かを感じさせていて。

来たか？

そんな不安と期待が交錯した状態で、ヽヽヽ

「妃杏は想う相手はいるのか？」

来たああああああああああ！！

前の展開がイツキにフラッシュバックする。

アタシに迷いは微塵もなかつた。

『ハイ、おつまむ。』

お父様をジッと見据えて。

今度こそ言つてやつたぞ。

かなり自己満足。

「そうか。それは相手は分かつてゐるのか?」

? ? ? ? ?
え え え え え
? ? ? ? ?

ある意味前回より強引じゃないか？

答えに困る...

心臓が破裂しそう

「分かりません。」

やつと口を開いたアタシと神楽の、2人の声が重なった。

心臓、物凄い速さ。

回数計測不可能。

わかわかわかわか
：

アタマの真面目

“分かつております”

今神楽、そう言つた？

言つたよねえ？？？

「 そうか。ならば構わん。邪魔したな。」

お父様は含み笑いで帰つていつた。

それだけ？

前回よつあひせつしてゐるが?

やつぱりお父様、
気付いてるのか！？

そじは変わつてないつてマト?

何なの」のぐわやぐわやな過去（過去～）。

神楽の顔が見れないよ。」

妃杏様

ナシ

神樂
。

胸が苦しい。.

神楽の方を見れない。

「身分違いと言うのは十分承知致しております。」

おい
おい
？

「自分にウソはつけない、 、 、 から。 。 」

h
h
h
?
?
?

頑張つてタメ語で話そうとしてないか？

ああああああ！――！――！――！――！

神樂がタメ語おおおおお

こんな展開ならアリだよ

大歡迎！————！

一妃格・・・セ・・・

アタシ、嬉しき。

神楽の顔がにじんで見える。

嬉しくて嬉しくて嬉しくてたまらない。

『様はいらぬ。2人の時はマネージャーモード止めて！？』

言いたくて言いたくて仕方無かつたコトバ。

時を越えて、やつと言えたよ。

今思えば、どうして言えなかつたんだろ？…。

たつたコレだけなのに……。

「ずっと…、好きで、だつたよ。妃杏…。」

ぴやあああああ

Oh my God!!

もう、顔が崩れきってるよ、完全に。

そんないエセハヤカた

とにかく嬉しいくて。

『もつ一度言つて！？何度も言つて！-』

泣きながら。

「妃杏、好きだよ。」

氣絶しそう。.

嬉しそぎて。

今までの“敬語神楽”が甦る。

こんなに嬉しくて泣くの、久し振り。

『ありがとう。ずっと待つてたよ。』

アタシと神楽の唇が触れ合った。

アタシは初めてじゃ無いけど、神楽は初めてだから震えている。

レジスターの丘で話した時の神楽も、サルミナ星を攻め込む寸前の神楽も、敬語だったのに…。

戻つて来たコトでまたトラップが現れたのかな。

神楽の心音が聴こえてきそうな雰囲気の中、アタシはノンキにも、そんなコトを考えていた。

どうでもいいか、今は…。

如月の願いも、

アタシの願いも叶つたんだから。

いい方向に変われたってコトで、

いいんだよね。

そつとストーンに問い合わせる。

その時、ストーンから金色にも見える光が射した。

まっすぐに天まで延びたその光は、無数の星が降り注いでいた。

空を見上げる神楽。

「 ハーヘ…。」

驚く神楽。

『 やつぱみじんなに変わつても、ハーヘは変わらないんだね。』

アタシも降り注ぐ星に向かつて呟いた。

「えつ？何？」

『 何でもナイの…。』

そつと、今度はアタシから神楽にキスした。

ほんの一瞬、かすかに触れたダケだったけど。

ありがとう、プラチナムストーン・プラチナムマウンテン…！

2回もこんな想いをさせてもらひたるなんてねつ。

ちやんと元の時代に帰つて来れたのも、未来を知れたのも、神楽を

隠し出来たのも、ストーンハーツの陰です。

ホントにあつがとついでれこます。

『如月?』

その日の夜中、アタシは如月を呼び出した。

如月は明日、旅立つ。

神楽が帰り、一人になつたらまた如月のコトが復活しちゃって、どうしようもなく切なくなつてきて。

いつもならもう寝てもおかしくない時間だつたけど、今夜は特別なのが、ソッコーで応答してくれた。

「妃杏様!! どうなさいましたか、こんな時間にっ!」

かなり慌てる如月。

そりやそーだよね。

『今夜で如月つて呼ぶの最後だね。』

ちよつとしみじみ。

「何を仰つてゐるんですか、これからもずっと、ワタクシひとつでは妃杏様は妃杏様です。しみつたれたコト仰らないで下さい。」

照れ隠しなのか、如月はいつも以上に笑っていた。

『まさかこんなに早くサヨナラする日が来るなんてね…。如月の願いが叶つたとは言え、フクザツだよ。』

まだ整理が付かないよ。

そう簡単に付くワケないんだよね。

帰つてきたその日に如月とお別れだつて知つたんだモン。。。

しかも明日。

お別れつたつて、関係が変わるダケで、2度と逢えないワケじゃな
いけど…。

涙を堪える。

「こつでも逢えますよ。」

笑顔の如月。

ひよつとドキッとしたやつほど爽やかだった。

『如月にはホントにお世話をなったよ、最後の最後まで。』

涙を堪えながらの笑顔はちょっと引をついた氣味。

「最後の最後まで？」

すかさず聞き返してきた。

アタシは話した。

一番アタシと神楽のコトを気にかけてくれた如月には言わなきやと思つて。

『きっと如月が勇気を出して、自分で皇女に気持ちを伝えたからだよ。ありがとう。』

コレが一番言いたかった。

「違いますよ妃杏様……！」

へ？

如月、メチャクチャ喜んでくれている。

「勇気を出したのは妃杏様ですよ。ワタクシはそんなコトが分かってるから言えたダケです。」

如月？？

それ言つたらアタシだつて…。

「妃杏様は、一度は“おりません”と御答えになられているにも関わらず、しかもそれでも結ばれるコトを知つていながらその事実を覆して“おります”とはつきり御答えになつたからですよ。妃杏様ご自身のお力です。おめでとうござります！—コレでお互いの願いが叶いましたね。」

如月…。

でも・・・・・・・・・・

そうなのか?・?・?・?

呆気に取られる。

“事實を覆して…”

このコトバがヤケに心に響いた。

確かに言つ時は“今度こそ”って思つたよ？

でも考えるより言つ方が先だつた。

だからそんなつもりは無かつた。

「それにしても…、お互いの結婚前に、どんなに秘密が出来ちゃいましたね…！」

コトバとは正反対な、歓びの顔の如月。

“ とんでもない秘密 ” ・・・か。

そうだね。

言つても信じてもらえないだろうからね。

2人、ダケの秘密だね。

お互いのパートナーにも内緒のステキな思い出。

神楽、ちょっと疑つてたケド！

『 それにして wonderf u l な夢だつたね。』

「 ハイ。」

如月の顔も充実感に溢れていた。

しばらく2人で余韻にひたつた。

過去に行つて未来に行つて…。

そつそつこんな経験、出来ないよ。

“ 貴重 ” と言つたのはおじがましすぎる経験…。

2人で明け方まで話してしまった。

如月はたくさんの人達に見送られ、これでもかつてくらいの満面の笑顔で旅立つて行つた。

アタシはいつまでも如月の跡を追つていた。

2人ダケのたくさんの思い出を浮かべながら…。

『ねえ神楽。』

その日の夜。

「何？妃杏。」

ふうううう

鼻血出してもいいですか？？？？？

まだタメ口神楽に慣れないモノで…。

アドレナリンが全開なモノで・・・。

いや、そんなムードじゃないだろ。

心の中で深呼吸。

『1つ約束して欲しいコトがあるの。』

神楽の目をジッと見て。

卷之三

引きつり笑いの神楽にアタシは大真面目に言う。

『もしもこの先、先にアタシが死んじゃつたり、いなくなっちゃつたりしても、バカなコトだけはしないでね。』

一切笑顔は出さなかつた。

呆れ気味に神楽は答えた。

「何を言い出すかと思つたら。」

完全に失笑。

実際オマエがそう言つ行動に出てるから言つんだろうがあああ！――！

心の中で叫ぶ。

内心キレ気味のアタシに、神楽はさりげなく微笑んで告げた。

「そんな心配いらないよ。妃杏が1人になるコトは絶対ナイから。」

アタシを見据えて。

ひやああああああああああ

氣絶するううう。。。

鼻血通り越して別のモノが流れ…。

しかも全身から…。

前の過去（？未来？）じゃ味わえなかつた感動。

神楽の口からこんなコトバが出るなんて・・・。

そう来たか。。。。

サイコーに幸せです！！！

皇女に継承権が移つたのはかなり意味不明だつたケド、そこへらい
かな。

未だに“タイムトラップ”に怯えてるケド、なんとなく分かつたよ。

どんな現実からも逃げちゃいけないんだつて。

まつすぐ向き合つて立ち向かつていかなきゃいけないんだつて。

今回のコトで良くわかつたよ。

過去に戻つてイグアス星がサルミナ星を侵攻するのを阻止したり、星とアタシ以外のみんなの中から如月の記憶が消えちゃつたり、未来の神楽がレジスター亞になつちやつて、ソレを変えちゃつたり、

あちこちで歴史を変えたせいで戻つてくるのがイヤだつたケド、

逃げずにちゃんと向き合つたら新しい歴史が出来上がつてた。

・・・だから思うんだ。

どんな未来も過去も全て自分自身次第なんだつて。

当たり前の口トだけビ、つべづべ思つ。

一時は、 “そりや時の迷子だつて帰りたくなるよな…。” つて思つちやつたけど、今なら言つてあげれるよ。

“ どんな未来もどんな過去も、やり直せない人生はないんだよ。 ”
つて。

“ だから戻つておいで ”

つて。

みんなが言つ程、タイムトラップは怖くなかったよ？

だから大丈夫。

「」のパートはアタシと如月の秘密。

お互にパートナーがいるモノ同士で秘密持つなんて、どうかとは思うけど、言ったトコロで“夢物語”にしか聞こえないだらうから。

でも、あんな夢、見たくても見れないよなあ。

ホントなら神楽にも憶えてて欲しかつたけど。

でも、あの過去があるから進める未来がある……

そんなステキな経験、もつたいないからイツか！！

もしかしたらホントにアタシと如月の見た、夢かも知れない。

それならそれでもいいよ。

何にしてもそのお陰で明るい未来になつたのは間違いないから。

そのうちいつか機会を見て、神楽や、いつか生まれてくる子供達に話してあげよう。

アタシと如月の夢の話を…………

ステキでリアルで素晴らしい過ぎた時間の話を…………

だからずっと、そばにいてね、神楽。

『ずっとずっとすばらしいね。』

「何当たり前の口と書ひてんの？離れないよ。ずっとすばにこるよ。」

「

タメ口神楽にはまだドキドキする。

だけど前の歴史じゃ、こんなドキドキ味わえなかつたもんね

新鮮でいいわ。

神楽より、アタシが持つてている2人の時間も記憶も多くて『めんね。

『ありがと。』

そいつ言ひてアタシは神楽にキスをした。

いくつもの想い出を胸に秘めて……。

如月とストーンだけが知る想い出を胸に……。

・

. . . f i n . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9100m/>

千の夜を越えて～虹の彼方へsecond story～

2011年8月22日21時40分発行